サイエントロジー：
その宗教組織と教義の分析
ならびに比較

ブライアン R.ウィルソン博士
社会学名誉助教授

オックスフォード大学
イギリス

1995年2月

サイエントロジー：
その宗教組織と教義の分析
ならびに比較

サイエントロジー：その宗教組織と教義の分析ならびに比較

目次

I.	宗教の多様性と定義の問題	1
II.	宗教の徴候	6
III.	非有神論的体系	9
IV.	宗教言語とキリスト教神学の発達	11
V.	宗教の社会的・道徳的機能	14
VI.	サイエントロジー、その概略的描写	18
VII.	サイエントロジー教会の 発展に関する社会学的分析	28
VIII.	礼拝と救いの概念化	34
IX.	学会のサイエントロジーに関する評価	41
X.	サイエントロジーと他の信仰	44
XI.	サイエントロジーに適用される宗教の徴候	46

サイエントロジー：
その宗教組織と教義の分析
ならびに比較

ブライアン R. ウィルソン博士
オックスフォード大学・社会学名誉助教授

1995年2月

I. 宗教の多様性と定義の問題

I.I.宗教定義の要素

学者の間で一般に受け入れられている宗教の決定的な定義は存在しない。しかし、これまでに唱道されてきた定義の多くには、かなり頻繁に引き合いに出されてきた要素がいくつかある。これらの要素は、さまざまな組み合わせをもって表現されてきており、その中の主なものは：

(a) 以下の事柄に関係する信仰、宗教実践、人間関係ならびに機構/制度：

1) 超自然的な力、存在または目標
2) 崇高で不可視の力
3) 人間の究極的な関心事
4) 聖なる事物 (隔離されたもの、禁じられたもの)
5) 精神的崇拝の対象物
6) 人間の運命を定める媒介者
7) 存在の根拠

8) 超越的知識ならびに知恵の根源

(b) 服従、崇敬または礼拝の本質となる実践

(c) 宗教的生活の集合的または集団的特性

いわゆる因果はめったに宗教の定義には含まれないが、「精神的なものとの経験的出会い」は、時としてそう述べられていることがある。宗教の持つ重要性ならびに機能は以下のように表される：

(a) 道徳的な共同体の管理維持

(b) 集団もしくは個人の自己認識の付与

(c) 方向付けの枠組み

(d) 人間らしく構築された意義ある世界

(e) 支援ならびに救済の望みに関する再保証と慰め

宗教は常に規範的なものであるが、個々の宗教が互いに他とは異なるので、現代の宗教社会学ならびに比較宗教学の専門家は、自らそれに傾倒することなく、その規範性を議論する道を選ぶ。このように、信仰や儀式ならびに組織の類型は、あまりにも多様ではあるが、どのような宗教の定義も、これまでに知られている宗教現象をすべて含めようとし、自らを汚しているのである。

I.II.本来の宗教概念の用い方

「宗教」という概念は、以前の西洋社会ではしばしば、信仰と実践の具体的現象と同一視されていた。一般的にキリスト教、ユダヤ教、イスラム教以外の人々は、正しい意味で本当の宗教を持たない、と考えられていた。それらは「異教徒」であった。神学者が「宗教」という場合は、キリスト教を意味するという傾向があり、英国で「キリスト教」と言えば、それはしばしば、特別に英国国教会に御用達された信仰を意味した。このように厳しく限定された用語の使用は、東洋の信仰組織が次第に解明されるにつれ、そして宗教学が伝統的キリスト教神学の狭い規範的、そして慣例的な制限を超越するにつれ、加速度的に後退していった。宗教は、純粋に学問のための研究対象となった。とりわけ、ある特別な宗教への執着心を言外に秘めたり、ある宗教が他の宗教より好ましいと断言したりすることなく、宗教に客観的、中立的に取り組む社会学の対象となったのである。

I.III.文化的偏見と宗教定義

しかし、宗教学における完全な中立性の発展は、非常に鈍いものであった。現代の比較宗教学のいくつかの研究は、明らかな偏見をいまだに露出している。価値判断抜きの明確な研究に没頭する社会学研究においてさえ、第一次と第二次世界大戦の中間の時代に行われた研究の中には、ある種の偏見が顕著に見られる。特に、生物学的進化の過程に類似する宗教的進化の過程があったとか、最も進歩している国民の持つ宗教は、必然的に他の国民の宗教よりも程度が「高い」などという推論が、しばしばいわれもなく仮定されてきた。ある人々によっては、(特に顕著なのはジェームズ・フレーザー卿)、宗教は魔術から科学への進化発展の段階のひとつである、とさえ信じられていた。

I.IV.現代的用法

今日、社会学者ならびに次第に数を増加しつつある神学者たちは、もはやひとつの宗教の真理が他の宗教のそれより優れているといった類いの**先験的**推論を隠喩することはもはやなく、中立的表現として宗教という概念を用いている。一神格への信仰が、多神格への信仰、あるいは神格皆無の信仰より、必然的に優れた宗教であるという推論はもはやなされることはない。宗教が、擬人化された神、その他の形を有する神格、崇高な存在、多数の霊魂ならびに祖先、世界共通の原理または法則、あるいは究極的信仰を仮定しているだろうとは認識されている。ブルトマン、ティリヒ、ヴァンビューレンそしてロビンソンのようなキリスト教神学者は、神格の伝統的な記述の仕方を放棄し、「存在の基底」とか「究極的関心事」という表現を好んで用いる。

I.V.宗教概念の拡張

文化人類学者は、社会がどういう形であれ、超自然的信仰やそれを支える機構/制度を持たないで存在したためしがない、という結論に達したことから、彼らは宗教という用語の広義の意味で、宗教なしに社会はあり得ない、と主張するに至った。その結果「宗教」という概念は、分有された自己認識よりも親近感の類似性という現象を指すものとなり、宗教は、ある特定の伝統だけに存在するという条件のもとで定義される、ということがなくなった。過去にキリスト教に固有のものであり、しかも宗教の定義に不可欠であるとされた具体的な項目は、現在ではその定義に含むことのできる事例にしかすぎない、と見なされるようになった。そのような具体的な要素の特定化に代わり、本来は同一のものではないが、機能的に類似するものとされるさまざまな形式の信仰、宗教的実践、機構/制度を内包する、より抽象的な要素の公式化が行われるようになった。それぞれの社会はどのように多様であっても、既知の経験的現実を超越し、人々と超自然的なものとの接触、または交信を促すよう考案された宗教的実践という信仰を持つ、という認識がなされた。このような目的に関

して特別な機能を果たす人々が、ほとんどの社会に存在した。これらの要素も共に、宗教を形成するものとして認識されたのである。

I.VI.単純な社会における宗教的多様性

比較的小さく、部族的な社会においては、往々にして非常に複雑な儀式ならびに神話が存在する。しかもそれらは通常一貫して、内部的に統一性のある理路整然としたシステムの構成にはなっていない。宗教は、社会が近隣の人々との接触あるいは彼らからの侵害を経験する時、変化を強いられ、神話ならびに儀式の双方に拡大現象が起こる。様相の異なる儀式ならびに信仰が、様相を異にする状況に付随させられることもあるだろう。(例えば雨乞い、穀物の豊作、家畜や主婦のための多産祈願、保護安全祈願、同盟の保証、一定年齢のグループまたは個人の入会など)。このような活動はすべて、(その定義がどうであれ)超自然的な媒介者に向かって捧げられ、学者によって宗教的と認定されるものである。

I.VII.先進国社会における宗教の多様性

技術の進歩した社会における信仰ならびに宗教的実践の規定は、一般的に言って、比較的念入りに一本化されたものであり、優れた内的一貫性と安定性とを示すものであるが、このように発達した組織においてでさえ、多様性という要素は執拗につきまとうものである。超自然的なものに関わる信仰の神学組織または図式化は、国際的とされるどの優れた宗教においても、完全につじつまの合ったものである。だが、常に解明されない部分も残る。また一般の人々の間に根強く残る民間信仰のように、初期の宗教的教えが残存する場合もある。主要宗教すべてが所有する聖典はみな、内的矛盾と非統一性を露呈する。これらと、その他の宗教源泉は互いに相違し、時には和解し得ない注釈図式や解釈原理を受容する宗教専門家でさえ、明確な相違を引き起こし、広い意味では正統派と認められるものの中に、違った伝統を植え付けていくことにもなる。

I.VIII.宗教的多元主義の発達

先進国社会における、正統派への意図的で意識的な不同意は、正常な現象として認められなければならない。キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒は分派が存在するが、それは正統派内部でも、そしてすべての正統派形式を拒絶し、宗教的実践の拡散パターンに従う分離派グループ(あるいは全面的に宗教を拒否するグループ)の中ででも分派していく。宗教的排他主義が流布する状況(ひとつの宗教への忠誠と共に、その他すべての宗教への同盟を破棄することが要求される)において、分離は最も顕著である。これは、ユダヤ教・キリスト教-イスラム教の伝統で厳しく要求される献身のパター

ンである。しかし、国家政府が宗教に特定の形態を指示することをやめたため、ヨーロッパ諸国では、分離表明の宗教団体は寛容に扱われただけでなく、ある種の普遍的な宗教特典にあずかり、米国では多くの場合、憲法に謳われた普遍的宗教自由を享受することができるまでになった。実に多数の教派が今日、隣り合わせで教団運営を維持している状況は、「宗教的多元主義」として知られている。

I.IX.宗教への規範的および中立的取り組み

宗教は特徴的に、超自然的なものに関するある種の物語や提題を示し、信仰を促すのが普通であり、 儀式の執行を規定する。そして (初歩的な対個人のレベルであろうと、また行為、手続きならびに資産管理という複雑な組織であろうと、広い意味での統制された人間関係の) 機構/制度を維持する。また時として宗教は、道義に適った行動の規則を制定する。そしてそのような道義性に付随した規定ならびに制裁の厳格さは、宗教によってさまざまではあるが、少なくとも宗教は、超自然的に与えられる恩恵の形に符合する責務を定義し、報酬を約束する。宗教は規範的組織を成立させる。宗教の教師 (キリスト教で言う「神学者」だが、この用語は他の宗教には適切ではない) は、必然的にこれらの規範を是認し、規範の遵守を要求する。それに対して社会学者は、宗教が提示する価値を、単なる事実と見なし、それらの権限または真価を是認もしなければ否定もしない。この取り組みは、法は諸宗教を差別しない、と宣言する法の公式化に似ている。宗教は規範的であり、知的な面は主に神学者によって保存されてきたものであるから、宗教的献身を規範的に刻印する宗教専門言語の遺産が、先進諸国には存在する。ここでは、宗教活動に加担する者への適切な配慮が絶えず求められると同時に、そのような言語に隠れている価値の先取りを避け、社会科学の中立的用語を用いることが不可欠と思われる。

I.X.「借り物」の専門用語

宗教の本質をめぐる初期の定義ならびに記述は、往々にしてそれらを公式化した者が宗教伝統から借用した用語を使ったものである。現在では、ひとつの宗教への固有な用語の使用は、他の宗教の記述を歪め、誤った憶測を招きかねない、という認識がある。ひとつの文化ならびに宗教からの伝統の中で進化してきた概念は、他の宗教に適用された場合、機能的には同等であり、形態的に独特な要素を持つだけだという、誤った表示をするだろう。そのような不適切な適用例として、「ブッディスト・チャーチ (仏教教会)」とか「ムスリム・プリーストフッド (イスラム教祭司)」とか、あるいは三位一体を「キリスト教の神々」とする言及法が挙げられる。同様に、崇敬、服従、沈思黙考、あるいは奉献の儀式がすべての高等宗教で行われるにもかかわらず、注釈者はそれらを必ずしも、礼拝として認めてこなかった面もある。その理由は、西洋的使用において、これらの言葉がキリスト教で言う正しい態度や行動への先入観や慣行に、強く偏向させられて来たからである。例

えば、礼拝者の気質を養うことにおいて、機能的にキリスト教の礼拝と同等のことが仏教でも行われるが、その形態は違ったものであり、普通は別の言葉で記述される。そのため、もし諸宗教に相互の均等と調和を求めるなら、宗教現象の多様性を包括することのできる、抽象化された用語の定義を用いることが必然となる。

I.XI.抽象的な分析または客観的な分析に、先天的に備わっている欠陥

抽象的な言語の使用は、どの宗教の特定の伝統にも汚されていないという意味で「臨床的」であると見なされるかもしれない。特定の、どの信仰にも固有な性質をすべて把握しようとすれば、必ず失敗に終わるものであるが、完全な評価を行うというのであれば、それは必要なことである。抽象的な言語の使用は、信仰、儀式、象徴、機構/制度の経験的側面や感情的側面をすべて表現し尽くすことはない。この社会科学的な取り組みは、客観的な比較や説明を可能にはするが、宗教が自らの信者のために内包する意味や感情への訴えの実質をすべて伝えることはできないし、伝えられ得るとも考えるべきではない。

II.宗教の徴候

II.I.宗教の本質的特色

以上で述べた考慮に従って、これから抽象的かつ一般的な用語で、宗教の原則的な特徴を表示することにしたい。しかし、以下に述べることは、宗教に頻繁に見い出され、認められる特色や機能を一覧にするといった、普遍的に適用できる定義の提示を意図するものではない。

(a) 通常の感覚的知覚作用を超越し、全くの仮定的存在の理法さえも含む媒介者への信仰

(b) そのような媒介者は自然界や社会秩序に影響を及ぼすだけでなく、それに直接働き掛けたり、またつくり出すことさえしたかもしれないという信仰

(c) 過去のある時点で、人間生活への超自然的な事象の介入が明らかに起こったという信仰

(d) 超自然的媒介者が、人間の歴史ならびに運命を監視してきたと見なす信仰。これらの媒介者が擬人的に描写される時、特定の目的を持つ者と信じられるのが普通である

(e) 現世ならびに来世における人間の運命は、これらの超越的媒介者が設定し、あるいはそれへの主従関係に依存する、ということを保持する信仰

(f) 超越的媒介者が気まぐれに人間個人の運命を指図する一方、その個人は規定された通りに行動することによって、現世または来世、あるいは双方の世界における自己の体験に影響を及ぼすことができる (一定不変というわけではないが、しばしば) と信じられる信仰

(g) 個人、集団あるいは代表者の実践のために規定された行動、すなわち儀式

(h) 個人または団体が、超自然的力の源に特別な支援を嘆願するという、和解的行動の要素が (高度に発達した宗教にさえ) 持続すること

(i) 通常、その信仰の超自然的媒介者を象徴する表象の現存する場所において、信者によって帰依、感謝、従順、または服従の表現が捧げられるか、またある場合は信者に要求されること

(j) 特に超自然のものと同一視された言語、対象物、場所、寺院あるいは季節が神聖視され、それ自身が崇敬の対象となることもある

(k) 儀式や顕示、奉献の表現、祝い事、断食、集団懺悔、巡礼などだけでなく、神格、予言者あるいは偉大な教師の地上での生活におけるエピソードの再演や、記念日などが定期的に演出されること

(l) 礼拝や教えの顕示が、共同体や善意、交わりや同胞意識という人間関係を肌で感じさせる機会を与えること

(m) 道徳律がしばしば信者に義務として課せられること。それが言及する領域はさまざまではあるが、時には戒律的ならびに儀式的条件として表現されたり、時には不特定の高尚な倫理精神という形で提示されることもある

(n) 規範的に要求される目標への真剣さ、永続する確信、そして全生涯にわたる自己献身

(o) 信者は能力に従って、因果応報の道徳的取引が付随する利益または損失を累積するというもの。行為と結果との間の厳密な関連は、所与の原因による自動的影響というもの

から、個人の損失は献身や儀式的行為、告白、悔い改め、あるいは超自然的媒介者の特別な執り成しによって帳消しにされるという信仰に至るまでさまざまである

(p) 普通は宗教職務担当者という特別な階級があって、神聖な事物、聖典ならびに場所の管理者として仕える。また教義、儀式ならびに教区の指導などの専門家の階級もある

(q) そのような専門家は普通、貢ぎ物として、あるいは特定のサービスへのお礼として、あるいは制度の俸給として、務めへの報酬を受ける

(r) 専門家が教義の体系に自らを没頭させる時、普通、宗教的知識がすべての問題に解決策を与え、人生の意味と目的が説明されるという主張がなされる。そしてしばしば、物理的宇宙ならびに人間心理学の起源や活動が説明される、ということも付随する

(s) 啓示や伝統に関する宗教的知識ならびに機構/制度の正当性が主張される。つまり革新とは大概復興として正当化される。

(t) 教義が真理である、および儀式が効果を持つという主張は、目標とするものが究極的には超越であり、目標および達成のために推奨される任意の手段には信仰が要求されるので、経験を主眼としたテストの対象となることはない

上記の項目は必須不可欠の条件としてではなく、蓋然性を持つものとして取られるべきである。それらは往々にして、体験できる形の現象を呈するものである。そのため、蓋然論的一覧と言えるかもしれない。

II.II.宗教の非本質的特色

上記の一覧は、かなり抽象的一般化において述べたものであるが、実際の宗教は歴史的存在であって、論理の構築物ではない。組織化の原則もさまざまであれば、行動規範や信仰のパターンも実にさまざまである。多くの点で一般論化は容易ではないし、一旦、キリスト教伝統の偏見 (多くは無意識でなされる) が除去されれば、実際、キリスト教の型を基とする宗教の必須条件と思われた多くの具体的項目を、他の宗教で目にすることはない。上記の一覧では、崇高な存在者への言及は極力避けた。というのも、上座部という小乗仏教徒 (そして多くの大乗仏教徒)、ジャイナ教徒、道教信徒にとって、この概念は何の効力をも持たないからである。礼拝は上記で言及したように、キリスト教で礼拝者が抱く意味と大いに違った意味が仏教にはある。この一覧は信条には何の言及もしない。信条はキリスト

教伝統では特異な重要性を持つが、他の宗教ではあまり重要なものではない。一覧は魂についての言及もしない。この概念は正統派キリスト教徒には致命的なものであるが、魂の教義がユダヤ教ではどちらかと言うと曖昧であり、ある種のキリスト教運動の間では明白に否定されているからである。例えばセブンスディ・アドベンティストとエホバの証人 (この団体はそれぞれ世界中に何百万人という信者を持つ。また道徳家として知られるキリスト・アデルフィアン派、詩人ミルトンを含む清教徒も、これを明白に否定する)。キリスト教で培われてきた地獄という概念を、どのような意味においても直接言及する宗教は他には存在しない。この項目はユダヤ教には欠如している。死後の命は、単一にまたは複数として、魂の輪廻ならびに甦りというキリスト教のふたつの違った考えを満足させるよう言及されるが、仏教徒やヒンズー教徒は少し違った形で、輪廻 (reincarnation) の教説を持つ。しかし、これらの項目はどれひとつとして、宗教の定義に本質的であると見なし得ないものである。

III. 非有神論的体系

III.I.有神論は宗教の本質的特色ではない

有神論 (一神教、多神教、汎神論) が宗教の本質的特色でないことは周知の事実である。実際に、学者も一般の人々も宗教的信仰体系は明らかに神的でないと見なす。そのような宗教の例は以下の通りである。

III.II.仏教：無神論的宗教

仏教は有神論的な信仰体系ではないが、キリスト教とは対照的でありながら、一般的に宗教として認識されている。仏教は神の存在を否定しないが、これらの存在は至高の存在や創造主にどうにかして近付く役割があるとは信じられていない。日本の浄土宗や浄土真宗でさえ、仏陀自身が救世主であるという考えに断固とした信念があり、この考えは仏陀を創造神であると見なすには及ばない。

III.III.上座部仏教の教義

上座部仏教はゴータマ・ブッダの教えに最も近い仏教の伝統であると見なされる。その教義は、キリスト教やその他の一神教が示す命題とほんの少ししか似ていない。どの上座部仏教の教えにも至高の存在や創造神を示すものはない。創造神の生産物であるというより、現象界は実体を持たない存在として見られ、人間は等しく永続性がなく、永遠の魂を持つとは信じられていない。すべての存在は苦悩によって特徴付けられ、仏教の教えの衝動はこの状態から人間を解放することである。人の

現在の状況はその人の業 (ごう) (karma) の結果であり、過去の人生における行いによる因果律がその後の人生の経験をほぼ完全に決定する。数々の人生は因果連鎖のように、それぞれの転生の「条件付きの起点」がある。したがって、人間は創造神によってつくられた存在ではなく、救済者という概念もなく、人間は悟りによってのみ輪廻転生という苦悩から解放される。各人は宗教的手引きによる導きの下、自分自身の悟りの道をつくっていかなければならない。仏教は神のような存在を否定しないが、これらの存在は崇拝の対象ではなく、特別な役割を果たさない。(それらは仏教が取り入れた他の宗教の伝統の残存物や付加物である。) 上座部仏教には創造神や救世主、不滅の魂、永遠の罰や栄光という概念がすべて欠けているにもかかわらず、仏教は無理なく一般的に世界宗教という地位を与えられている。

III.IV.ジャイナ教は無神論の宗教である

ジャイナ教はインドとそれが実践されている国々において公認の宗教となっており、11大宗教のリストにも入っている。それについて、チャールズ・エリオット卿はこう記している。「ジャイナ教」は無神論的であり、この無神論は一般的に弁解や論争はされないが、自然宗教の一形態として受け入れられている。ジャイナ教徒は、「神々 (devas)」の存在や神性を否定しないが、これらの存在は人間に似たものであり、輪廻や衰退の法則に従うものと見なされ、人間の運命を定めるものではない。ジャイナ教徒は、魂が独自なもので無限であると信じている。それらはひとつの万能の魂の一部ではない。魂や物質は創造も破壊もされない。救済は重荷となる他の要因 (業) から魂を解放することによって達成されるべきである。個人の激しい感情を伴う行為によって、魂に認められる要素である。そのような行為によって動物や無生物の再生が起こり、称賛の行為が神々の間で再生を引き起こす。怒り、うぬぼれ、偽り、貪欲さが魂の解放にとって主要な障害であるとはいえ、人は自分の運命の主人である。自己を克服すること、どんな生物にも害を与えないこと、禁欲的な生活を行うことによって、神として再生を遂げる。敬虔な信者にとって道徳規範は、見返りを期待しない親切さを示すこと、他人の幸せを喜ぶこと、他人の苦悩を取り除こうとすること、犯罪者に同情を示すことである。自己苦行によって蓄積された業の影響を受けないようにする。

III.V.ヒンズー教のサーンキヤ派：
無神論宗教

ヒンズー教は、正統派として古代の6つの分派を認めている。これらのひとつ、サーンキヤ派は有神論でも汎神論でもない。ジャイナ教のように、サーンキヤ派は根本的な事柄や個人の魂は創造されず、破壊できないと教える。魂は、宇宙についての真実を知ることや、激しい感情の制御によって解放されることがある。いくつかの教本の中で、サーンキヤ派は至高の神の存在を否定し、どのよう

な場合でも神の概念は余計なものであり (業の働きが、解放を求めることをその人自身で決定できるまで、その人の諸事を支配するため)、それ自体が矛盾したものと見なされる。サーンキヤ派の4つの目標は、仏教のそれらと似ている。苦悩を知ること、そこから人は自分自身を解放しなくてはならない。痛みを止めること。苦悩の原因 (魂と物体を識別し損なうこと) に気付くこと。解放、つまり知識を識別する手段を学ぶこと。他の宗派のようにサーンキヤ派は輪廻の原則を教える。再生は人の行動の結末であり、救済は再生のサイクルから逃れることである。

III.VI.サーンキヤ派の無神論的特徴

サーンキヤ派には、神や神々の存在を中心に展開しない二元論の形態が含まれる。これは善と悪というキリスト教の二元論ではなく、魂と物質の本質的な違いである。両方とも創造されない、無限に存在するものであり、世界は物質の進化の所産である。しかし魂は変化しない。苦悩する魂は物質に捕らわれているが、この捕らわれているものが幻想である。魂が物質世界の一部ではないと気付けば、その世界は特定の魂のために存在するのをやめて自由になる。サーンキヤ派の理論によると、物質は進化し、分解し、活動しなくなる。進化において、物質は知性、個性、感覚、徳性、意志、そして死を切り抜け、転生を経験する原則を生み出す。魂とつながることで、身体組織が生物になる。このつながりによってのみ意識が認識される。物質も魂もそれ自体は意識ではない。魂は生命を与える要素であるが、それ自体が生命を死で終わらせるのではなく、ある存在から別のものに転生させるのでもない。それ自体が作用したり、苦しむことはないが、鏡が像を映すようにその魂が苦悩を映し出す。それは知性ではなく、無限で激しい感情のない実体である。魂は無数にあり、それぞれ異なる。魂の目標は幻想や捕らわれた状態から解放されることである。解放されると、魂の状態は仏教の涅槃と等しくなる。そのような解放は死ぬ前に起こるとされ、解放された人の役割は他の人に教えることである。死後、再生の恐れなく完全な解放の可能性がある。サーンキヤ派は一般の神を信じることに反対はしないが、これらはその行動規範の一部ではない。それは宇宙の知識であり、救済をもたらす。この意味では、道徳的な行為ではなく、激しい感情の制御が中心である。善行は低いレベルの幸福しか生み出せない。犠牲も有効ではない。倫理も儀式もサーンキヤ理論の性質上、大きな重要性を持たない。

III.VII.有神論基準の不適切さ

前述の宗教の信仰体系の例から、至高の存在やいかなる有神論の形態の信仰も、宗教の基準としては不十分であることは明らかである。あるキリスト教解説者の長きにわたる時代遅れの偏見にもかかわらず、この点は比較宗教学者、宗教社会学者によって一般的にすぐさま認められる。仏教、ジャイナ教、ヒンズー教のサーンキヤ派にせよ、至高の存在や創造神の概念の欠如にもかかわらず、宗教としての地位は奪われない。

III.VIII.道教の事例

道教も、宗教として一般的に認められてきた。そして通常、その中心信仰を論理的に解釈する難解さにもかかわらず、比較宗教学の教科書にも載っている。啓示宗教とは対照的に、道教は自然崇拝、神秘主義、運命論、政治的静寂主義、魔法、先祖崇拝に頼る。それは中国で何世紀もの間、寺院、崇拝、聖職者を有する組織宗教として公認された。それは超自然的存在の概念を有し、中国民話の八仙人の不死身の存在とともに、玉皇大帝 (ぎょくこうたいてい)、老子、李白 (超自然的存在の保護)、そして無数の精神とともに城隍神 (じょうこうしん)、かまど神などが含まれる。道教には、至高の創造主、キリスト教のような救世主、明確な神学、宇宙論が欠けている。

IV. 宗教言語とキリスト教神学の発達

IV.I.宗教思想の進化

道教の事例は、宗教が信条、実践、組織という体系として成熟した状態で現れることがない事実を説明している。それらはすべての側面において進化の過程を経験し、時に以前の位置と全く違った要素を含むようになる。例えば、何十年もの間、英国国教会の主教たちが処女懐胎、イエスの復活、イエスの再臨のような信仰の中心的信条に公に異議を唱えた。もうひとつの例は、変化する神の概念である。ユダヤ教とキリスト教が融合した聖典に明らかである。古代イスラエルの民族神から、後の預言者の書物や新約聖書で見られるように、ずっと精神的に考えられる普遍的な存在になった。異なる神の描写の融合は、キリスト教の教会内部や教会間で論争をもたらした。そして根本的な前提がキリスト教史において次第に変化してきた。キリスト教の神の概念の根本的な変化は今日でも起こっている。

IV.II.最近の神学的な神の再評価

そのような最近の重要な考え方のひとつは、キリスト教の地位に深い意味を持っている。キリスト教会によって伝統的に高く評価されている、至高の存在があり得るという考えについて、広く徹底的に議論された。この意見の動向は、最も著名な神学者たちによって唱えられている。特にディートリヒ・ボンヘッファーとパウル・ティリヒの著作である。現在の目的にとって、それは最も有名で影響力のある言い回しの良い例であろう。1963年当時、ウーリッジの英国国教会の主教だったJ.A.T. ロビンソンは、神学的な考えの流れを、ベストセラー著書『Honest to God (神への誠実)』にまとめた。この主教は、「そこに」存在する個人としての神への考えの放棄に対して論争を始め、「キリスト教の有神論」という全体構想に挑んだ。

IV.III.キリスト教の無神論の証拠：ロビンソン

以下の引用は、主教とその仲間が、信者や法律によって受け入れられている、伝統的な一神教を崇拝する前提を離れた広がりを明らかにする。

主教は自分の議論を支持するものとして、以下のようにボンヘッファーを引用した。

> 人間は実用的な仮説としての神に頼ることなく、すべての重要性の疑問に取り組むことを学んできた。科学、芸術、倫理に関する疑問ですら、もはや人があえて論争を行おうとしない了承事項となった。しかし、過去100年ほどの間で、それは宗教に関する疑問においても真実になってきている ― 今まで通り、「神」がなくともすべてが機能することが明らかになってきている。(p.36)

以下にティリヒを引用する。

> …あなたは神について学んできた伝統的なすべてのこと、恐らくその言葉そのものでさえ忘れなければならない。(p.47)

主教はさらにこう付け加えた。

> ティリヒが神について「掘り下げて」話す時、もうひとつの存在については全く話さない。彼は「すべての存在の無限で無尽蔵の深さと見方から話す…」(p.46)

ティリヒ自身について、彼はこう述べている。

> …ティリヒによると、有神論では通常の理解は「世界と人類を主宰する神々しい完全無欠な人として神をつくった」(p.39) …私はティリヒがそのような最高位の人物に対して無神論の異議は正しい、と言うのは正解だと思う。(p.41)

彼は神学作家ジョン・レンルイスを賛意をもって引用した。

> 天の老人は単に背景にある無限の心に対する神話的な象徴に過ぎないだけでなく、この存在は恐ろしいというより慈悲深い。真実は、この考え方全体が間違いであり、そのような存在があるとしたら、まさしく悪魔であろう。(pp.42–3)

この点を強調するために、彼はこう述べている。

> 私たちは明らかに、もはや世間の人間に「そこにいない」神の存在について信じ込ませることはできないだろう。オリンポスの神々を真剣に取り上げて説得するよりも、自分の人生を送ることを命じなければならない。(p.43)…『神は個人的なものである』と言うことは、その個性はその宇宙の成立や他のどこにもない存在の最終的な意味に触れる、人間関係にとって極めて究極的な重要性を持つ。(pp.48–9)

現実と存在を識別することが神学者の仕事なので、この司祭は、神が究極的には真実であるが存在はしないと断定し、存在するには空間と時間に制限され、それはその宇宙の一部になる。

IV.IV.キリスト教の無神論の証拠：ヴァンビューレン

同1963年、米国の神学者ポール・ヴァンビューレンは、『The Secular Meaning of the Gospel (福音の世俗的な意味)』を著し、そこでボンヘッファーの「無宗教のキリスト教」つまりキリスト教は宗教ではないという考えを徹底的に議論した。ヴァンビューレンは、もはやキリスト教はいかなる意味でも神への信仰に傾倒しているとは理解されない、とロビンソンよりもさらに強く主張した。彼はすべての神への神学的言及が削除されるべきだと提唱した。彼はこう述べている。「…単に形式的な有神論は誤っており、形式的な有神論は無意味である。」(p.100) 他方、人は恐らくイエスという人物の人間性を持ち続ける。「…彼の神性という問題は恐らく減少するだろう。」キリスト教の無神論は、ヴァンビューレンによって提唱された神学に与えられた名称だった。福音書は神についてではなく、イエスについてであり、イエスは人として認識されるべきだった。ゆえに、キリスト教が至高の存在への関与があるので宗教であるという、すべての主張がヴァンビューレンによって捨て去られ、そのような主張は別の神学的考えの流れを代表する、同時代の「神の死」学派の神学者によっても放棄された。

IV.V.イエスの再評価

1906年に英語訳されたアルベルト・シュバイツァーの作品 『The Quest of the Historical Jesus (イエス伝)』が出版されて以来、新約聖書そしてイエスという人物についての新解釈も神学仲間で進められてきた。シュバイツァーは、イエスが、いくらか誤った考えを持つユダヤ教の預言者であり、その時代の創造物であったと明らかにした。ルドルフ・ブルトマンによって、もっと急進的で重大な「非神話化」の方法が着手された。彼は1940年代初めに、福音書が、それらの書かれた時代と場所で広まっている神話の影響をいかに受けたかを十分に示した。彼は続けて、福音書の中で21世紀の人によって受け入れら

れる考えが、いかに少ないかを示した。ブルトマン自身はドイツ実存主義哲学という言葉で、新約聖書から人類へのメッセージを保存しようとした。キリスト教は個人の道徳的な生活の指針となったが、もはや神の創造と世界の統治についての教えの体系としては信頼できなくなった。ブルトマンの著作の増大する影響は、イエスが神だという伝統的な主張について新たな疑いを強め、 今やキリスト教会の教え全体に疑いが投げ掛けられた。これに対する歴史的な相対主義としての取り組みは、1977年に出版された『The Myth of God Incarnate』 (編集者：ジョン・ヒック教授) という著書の中での新たな表現に見られる。その中で最も著名な英国国教会の神学者の何人かは、人間であるイエスと神との関係について、伝統的なカルケドン信条 (451年の教会会議) 擁護派の見方に異議を唱えた。現代の神学者たちによると、この15世紀にわたってキリストの教えが断言してきた、神が人間になったと信じることは難しいとされる。

IV.VI.宗教ではないと言われるキリスト教

これらの最近のさまざまな神学論争 (熟考した上で人格神の概念の拒絶、有神論の放棄、聖書の相対主義に対する新たな注目で、キリストの本質として一般に認められた概念と彼の神性との関係への挑戦) はすべて、一般に認められているキリスト教の教義の理解からはひどく掛け離れている。ヨーロッパにおいて、キリスト教は長きにわたり、宗教に関する概念の暗黙の了解であったが、今ではそれ自体が宗教ではないことを示している。このように、以前に宗教のカテゴリーに入っていたものが、今では疑問視されている。

V.宗教の社会的・道徳的機能

V.I.現代宗教と変化する社会的機能

何が宗教を構成するのかという、伝統的であるが、明らかに時代遅れのキリスト教の概念に由来する明確な要素から離れ、私たちはその主題の基準的でない、社会学的研究を強調した宗教の特徴について簡単に触れてみたい。超自然的 (または超経験的) な面を持つ現実的な関心事の重要性を無視しない一方で、社会科学者たちは宗教が果たす役割を強調する。宗教はグループの中に連帯意識を生み出し、強化し、促進して、一体感を与える。ピーター・バーガーの言葉を借りれば、「意味のある人間的につくられた宇宙」は考えと行動が判断される中、知的で道徳的な枠組みになる。科学の発展に際して、宗教がやむを得ず創造や宇宙について特定の理論を放棄する場合でも、それは宇宙や人間の生活に含まれる目的の説明を提供し続ける。

V.II.現代宗教と倫理的責任

西洋世界の一般大衆はより教育されているので、現代宗教は神、創造、罪、人間化、復活などに関する教義をあまり強調する傾向にはなく、社会の倫理観や個人の責任、究極の意義や目的の感覚の提供、個人指導の源、この世界での個人の達成への道などにより重点を置く。

V.III.現代宗教と社会問題への関心

イギリスで19世紀半ばに始まったパストラルケア (聖職者から与えられる心理療法的なケア) への関心が高まり、今では多くの新たな特定のパストラル聖職者による形態が見られる。企業のチャプレン職、病院や刑務所での仕事、専門カウンセリングなど。例えば、結婚ガイダンス、キリスト教療法、中毒者や自殺の恐れがある人への取り組みなどが含まれる。身体および精神の健康、性や家族の問題、教育や職場での人間関係に関するアドバイスは、多くの宗派、特に比較的最近設立された教派や宗派における宗教的文献で、ほぼ主要な問題となっている。

V.IV.現代宗教と生活強化

いくつかの新宗教運動において、人生における意義と目的を人々に与えるという主張が明確な焦点となっている。そのような運動は通常包括的で、そして時に複雑な形而上学的なシステムを提供する。その中でそれらの信者たちは、究極の関心の問いに対する知的な回答を発見する。そのような運動には、神智学、人智学、グルジェフ主義、コスモン信仰、新思想 (New Thought) 運動が含まれる。現代社会が、死後の世界へと関心が移ったことを強調し、新しい運動 (そしていくらか前に設立された教会) は「現世の」活動や目的を強調し、「人生の充実」という一般的な目標を追求するようになった。食糧難の時代や自然災害などで高められた宗教の禁欲主義は、その後のより豊かで、大規模な災害や社会災害を取り除いたり、防止するための計画を持つ、包括的な社会においてはあまり適合しない。現代の世俗社会における快楽主義的な価値観の流布は、宗教にも反映されており、人々に人生におけるより良い経験を明確にしようとする積極的な思考の強調は、1940年代のアメリカで新宗教として広く流行した。

自己統制、自己改善、新たな動機付け、幅広い精神的な能力の向上にとって、心理学的なテクニックは多くの宗教運動の一部となり、かつて伝統的なキリスト教教会によって徹底的に議論された、罪を負った神学の支持からは離れる傾向にある。

V.V.宗教と道徳の関係

多くの宗教は、信奉者の遵守事項として、ある程度の特殊性を持つ規則を規定する。それらの性質、それらが規定する力と付随する規則の厳格さは、宗教によって大きく異なる。ユダヤ教では、規則が、儀式の細かい点や日常生活における多くの起こりうる出来事を規定する。イスラム教では、宗教規則がさまざまな生活の状況に影響しており、社会に対して法規制を提供する。他の場所では、道徳規範が必ずしも宗教から派生するわけではない。例えば日本の社会などである。そこには宗教教義の制度と道徳規範の間に正規の関係はない。キリスト教における宗教と道徳の結合は、ひとつの関係のパターンであるが、このパターンは、他の宗教制度にとって典型ではなく、そのような関係にとって必要な型とは見なされない。

V.VI.仏教と道徳

例えば、上座部仏教では僧侶に対する規定と信徒に要求されるいくつかの通則がある。仏教徒には殺生や盗み、淫らな性行為、飲酒などを行わない務めがある。仏陀は家事、友人に対する振舞い、配偶者の世話に関して道徳的なアドバイスを提供したが、それは社会常識と呼ばれることの奨励である。人は慎み深く、倹約し、勤勉で、使用人に公平であるべきで、過ちを制し、正しい行いを強く勧める人を友人として選ぶべきである。これらの徳は、啓発された利己心として要求されるものであるが、キリスト教で徹底的に論じられてきた罪の概念は支持されていない。これらの徳を軽視することは、悪い業を生み出すという意味を除いて、特別な罰の対象にはならない。仏教において、悪行を避けることは (少なくとも長期における) 啓発された利己心に関することである。宗教自体は処罰をしないし、激怒する神は存在しない。しかしながら、行動性が将来の輪廻の状態を決めると考えられるので、8段階の啓発の道に従って存在するために善行が勧められる。それらによって、より良い条件で再生するには、すべての究極の再生の超越と涅槃の達成へと導かれる必要がある。したがって、仏教は確かに倫理的価値観を徹底的に議論する一方で、人は自分の道徳的な行いにおいて自由になれると考えられ、キリスト教の中ではびこっている道徳的批判とは違うものである。

V.VII.キリスト教と道徳

明確な対照として、伝統的なキリスト教では、そのさまざまなレベルの倫理的な教えの中には、念入りな禁止規則、罪と見なされる違反が含まれている。重大な犯罪を顧慮する初期ユダヤ教の最小限の戒律は、さらに多く要求される趣旨の規定によって増加された。特に性に対する尊重、そしてこれはイエスとパウロからである。達成できない程の完璧さについての勧告もあった。(「完全で

ありなさい」さらに、「汝の敵を愛し、77回許しなさい」や「もう一方の頬を向ける [仕返ししない]」などです)。しかしそれは、キリスト教がまさに行動指針をつくり上げるために生まれた罪の概念にあった。人は本質的に罪深く、悲惨な状態を持っており、そこから模範的な徳、そしてキリストという超人の犠牲によってのみ自分を救うことができた。旧約聖書 (儀式の失敗、間違った動機、不当な行為、偶像崇拝、神への不服従) が示唆する欠陥は、責任の欠如、人格や良心の根本的な欠落にまで広がった。創造された宇宙は、アウグスティヌスによって本質的には罪深いものとしては見られていないが、人は罪深く、罪の性質は本質的に欠如的なもの (欠如・欠落・欠陥) であった。この見方が中世カトリック教に知らされた。

秘密告解の機構/制度、懺悔の入念な手順の開発、それから煉獄の概念の詳細、罪と見なされる重大性を示唆した。しかし、カトリック教は、罪に対して精力的に宣言する一方、人類の弱さを認識したにも関わらず、告解制度によってそれを引き受けた。プロテスタントは罪からの解放に対するこの手段を拒絶した。カルビン派は、罪人個人の苦悩を強め、神学体系を発達させたことに功績があると考えられている。それが品行の制御の内在化と善悪の構造を導いた。

V.VIII.キリスト教徒の罪に対する態度の変化

ようやく19世紀に入り、キリスト教徒の罪に関する先入観が変わり始めた。その世紀の間に次第に、キリスト教徒の地獄や天罰への先入観が弱まったが、この時期までに世俗の道徳的価値観は一般の生活への影響を自主的に受け入れた。20世紀には、ビクトリア朝の道徳性の厳格さが徐々に緩和され、1960年代には緩和への激しい要求が生まれ、特に性行為の領域において、道徳的寛容さがそれに取って変わった。したがって、宗教と道徳性との関係を仮定した型は、キリスト教の場合でさえ普遍性から離れてきたことが明らかである。この多様性の基準は常に存在するものではない。それは同時代の宗派においても裏付けられる。現代の福音主義者 (英国の教会の中には、いくつかの宗派がある) に見られる道徳的姿勢は、多くの振舞いの領域において個人的な罪を持つという強い先入観を継続して表明している。対照的に、罪の考えは、多くの自由な教会の聖職者の中でほとんど時代遅れのものとなっている。その内の何人かは、キリスト教会で伝統的に採用されてきた絶対的な道徳指針という主張を完全に拒絶している。むしろ倫理的性質に傾倒することで、キリスト教の一般的な道徳指針と激しく衝突することがある。もうひとつは、クリスチャン・サイエンスで採用されている全く異なる態度である。その中で罪は単なる現実性についての偽りや不安から生じる間違った行為としか見なされない。そしてそれは病気とともに、物質的なものから精神的考え方への変化によって消え去ると信じられている。

V.IX.キリスト教の聖典礼と聖職の側面

宗教的信仰と価値観は、通常シンボルに表され、上記の段落II.I.で示されるように手順と機構/制度が定められる。そのようなシンボル、手続き、機構/制度の形態は多様であるが、もう一度、キリスト教会によって提供される型 (キリスト教社会で容易に採用されるもの) は、他の信条には不十分な指標である。キリスト教自体には多様な表現形態があるが、これらは単なる美学や利便性によって決められた偶発的で無秩序な違い以上である。その違いは時に深い信念を表し、信仰の中核にまで及ぶ。世界の主要な宗教的伝統は、聖職制度から犠牲的行為、礼典主義、豊富な信仰の補助器具 (お香、踊り、イメージなど)、禁欲主義、口述表現や祈りの言葉への極端な依存まで多様な方向性を示している。両極端は、ヒンズー教、仏教、キリスト教で遭遇することがある一方、その伝統的な表現において、イスラム教はおしなべて禁欲主義であり、その熱狂的な示威行動がその周辺で起きている。

それはキリスト教の伝統の中に広がっている多様性を説明するのに十分であろう。ローマ教会における伝統的な発展は信仰サービスにおける聴覚、視覚、嗅覚の凝った使用がそれをよく表している。カトリックの礼拝式 (ダンスや薬物の使用を放棄する一方、その他の伝統を採用) では、凝った儀式や衣服、豊富な式典やその日時の決定、教会の聖職位階制を含む聖礼典、個人の通過儀礼がある。ローマ・カトリックと好対照なのがクエーカー派で、その司祭職の概念、聖礼典のない記念儀式の成立 (プロテスタント教会の儀式のパターンさえ共通)、彫像や法衣の着用は認めない。どんな建物や場所、季節、式典であれ、行われるパフォーマンスの妥当性の強調、聖礼の拒絶、そしてロザリオやお守りのような信仰の助けは、多かれ少なかれ多くのプロテスタント宗教で特徴的である。 福音主義者 (さまざまな宗派がある) は司祭職の考えを拒絶し、クエーカー派、同胞派、キリスト・アデルフィアン派、クリスチャン・サイエンスは有給の聖職者さえ認めない。洗礼派は洗礼を継続し、他の多くの宗派が聖餐式を継続しているが、本質的な有効性のあるパフォーマンスではなく、単なる聖典に忠実に従う記念行為として残している。

プロテスタント宗教は、カトリックの信仰よりも聖書が盲目的信仰に陥る危険性があるほど、聖典に書かれた言葉に重きを置いてきた。慣習と実践は、どの宗教でも持続しているが、これらは最小限になることがある。クエーカー派は集会の時間と場所だけを決め、キリスト・アデルフィアン派は、誰もが平等に神の奉仕に従事することになっているため、地域社会におけるオフィスや地位を設けないようにする。

VI.サイエントロジー、その概略的描写

VI.I.新しい宗教としてのサイエントロジー教会

サイエントロジーは新しい宗教運動のひとつであり、いくつかの点で西洋宗教の主流に顕著な傾向に呼応するという特色を、ある程度備えているものである。[上記の段落 V.I.–V.IV.で述べた通り]サイエントロジーは現代的、口語的であり、使用する言語は神秘性を含まない。そしてその教義は、客観的事実として表示される。救済の概念は、世俗的側面と究極的側面の双方を持つ。サイエントロジーが西洋世界先進国の民衆に幅広く訴えてきたことは、社会学者ならびに現代宗教の学徒の間で注目を浴びてきたものである。

VI.II.私の知るサイエントロジー

私は1968年、サイエントロジー教会の発行した文書を読み始め、一時はこの運動の研究の企画もした。最終的にはその企画を推し進めなかったのだが、私はサイエントロジーの文書を読み続けた。私はイースト・グリンステッドのセントヒル荘にある教会本部を訪ねたこともある。そこで何人かの社会学者と親しくなった。それ以来私は、英国でのこの運動の連絡係を務め、セントヒル荘ならびにロンドンのサイエントロジー教会にも幾度か訪問する機会を持った。私は引き続き、社会学者としての興味の対象である現代宗教のひとつとして、この宗教の発展に注目してきた。私が読んだものの中には短命なものもあるが、公刊物である以下の作品のほとんどはL. ロン ハバード氏の著書であり、私がお勧めするものである：

『プリ・クリアーのためのハンドブック』
『サイエントロジー 8-80』
『サイエントロジー 8-8008』
『Eメーター入門』
『ダイアネティックス：原論』
『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』
『全軌跡想起の実験 (A Test of Whole Track Recall)』
『仕事を楽しくする本』
『自己分析』
『人間の能力の創造』
『フェニックス講演』
『サイエントロジーの公理 (The Axioms of Scientology)』
『上級の手順と公理』
『サイエントロジー ：人生への新しい視点』
『サイエントロジーの特質 (The Character of Scientology)』

『サイエントロジー創設教会の儀式 (Ceremonies of the Founding Church of Scientology)』
『サイエントロジー宗教 (Scientology Religion)』
『生存の科学』
『サイエントロジーのエシックス入門』
『しあわせへの道』
『サイエントロジー宗教の解説 (Description of the Scientology Religion)』
『サイエントロジーとは何ですか?』
『サイエントロジー・ハンドブック』

私は、かつて新しい宗教についての著書のさまざまな箇所で、サイエントロジーについて言及し、私の本『Religious Sects』(London: Weidenfeld, 1970年) はこの宗教についての短い説明を含み、また後年の著作『The Social Dimensions of Sectarianism 』 (Oxford: Clarendon Press, 1990年) でもサイエントロジーの宗教的性質についてかなり長く論じた。私は過去26年間、一度も興味を失うことなく、この運動を見守ってきた。

VI.III.ダイアネティックス：サイエントロジーの起源

1950年5月、L. ロン ハバード氏が、後にサイエントロジーとして発展させることとなるダイアネティックスの設立趣意書を公にした時、氏には宗教的信仰および実践のパターンを推進している影はどこにもなかった。ダイアネティックスは一種の反応を除去する療法であるが、宗教的教義としては発表されなかった。ダイアネティックスがやがて宗教的信仰および実践の組織となることや、氏の弟子たちがそれを教会と呼び、組織するようになるということを、当時のハバード氏が意図していたと想像できる正当な根拠は、どこにも見当たらなかった。

VI.IV.精神的癒しと宗教

しかし、クリスチャン・サイエンスや新思想運動、そしてヨガの技法に見られるように、形は違うにせよ、治療的な実践は、しばしば形而上的かつ宗教的な関係を習得する潜在性を示していた。他方、既成の宗教は時々、癒し、特に精神的治療に関係した専門家の活動を開発、発展させてきた。そして主流派教会には時に、このために組織された部門があった。ダイアネティックスは当初、宗教的原理を呼び掛けはしなかったが、実践のための理論を正統なものとする努力がなされるにつれ、形而上的側面が次第に認知されるようになり、提起された考えの中には優れた宗教的な暗示があった。

VI.V.宗教への発展

すべての宗教は、進化の産物である。どの宗教でも、初めから十分に発達した信仰と実践の体系として存在していたものはない。この点において、サイエントロジーも例外ではない。すなわち、治療的理論からひとつの宗教が発展したのである。キリスト教がいつ宗教となったか述べることは、とても不可能なことである。初めは、体系化されていない倫理的説教や時々の奇跡に始まり、ガリラヤ人の間で人気を集める民衆運動となり、次第にユダヤ教内の一党派となり、その後明白にひとつの宗教となっていった。当時でさえ、宗教の教義が十分に明確な表現で表されるまでには、何世紀をも要したのである。そしてその儀式的実践は、たゆまない変化の過程を経て、今日に至ったものである。ごく最近の宗教運動では宗教に進展する過程を、もっと明確に観察することができる。セブンスディ・アドヴェンティスト教会は、その起源をイエス・キリストの到来がごく近い将来だとする広範に広まっていた信仰にまでさかのぼることができる。この信仰は、1830年代のニューヨーク州北部で、バプテスト、長老派、メソジストその他のクリスチャンの間で信じられたものである。同様に、ハイズヴィルでの「ラッピング」と呼ばれる霊媒と霊とのコツコツ叩く通信（「霊魂の世界」からのメッセージと言われている）の最初の体験から、スピリチュアリスト教会が形成されるまでは、何十年という年月を要した。また、メアリー・ベイカー・エディーは1866年に自分で精神的癒しの「発見」をするまで、精神治療の制度を何十年もの間実験していたのである。そして1866年以後の数年間、彼女はこの発見を、チャーチ・オヴ・クライスト・サイエンティストという彼女が1875年に創立した教会の基礎とするよりも、最初は主流派教会に持ち込もうとした程である。ペンタコステ派の人々は、未知の言葉を話したり、予言したり、癒しをしたりするカリスマ、その他の「賜物」を1900年代から経験してきているが、この運動が独立したペンタコステ教会として形成されたのは、その後の20年間、大変鈍い道のりを経てのことであった。これらの運動は後には独立した宗教となったものの、そのひとつとして初めからそうであったわけではない。同じことが、サイエントロジーにも言える。

VI.VI.サイエントロジーの教義：形而上学の発展

以下に詳しく述べることの繰り返しとなるかもしれないが、サイエントロジーの主要教理の総合的声明を広義の用語で言い換え、これらの信条が、一貫した宗教組織を成しているというところまで言及することは必要なことである。サイエントロジーは、ダイアネティックスという、どちらかと言うと狭い領域に集中した治療組織から派生した。このダイアネティックスという用語が、dia「～を通して」と nous「マインドまたは魂」との合成語であり、たとえ当初は全面的に意識されていなかったにせよ、すでにそこに宗教的な見方が備わっていた、との指摘が過去になされた。ダイアネティックスをサイエントロジーのより広い枠組みの中へ組み入れる方法で、膨大な総合的形而上学組織への概念化が、この哲学の宗教的性質を根本から解明するとの言明がなされた。キリストの生存時代、彼の教

えの直接的適用が精神治療の領域でなされたように、ダイアネティックスの直接の適用は精神治療の領域でなされたのであるが、他方、その治療活動を説明し推進した後代の教えの主旨は、精神的考えや価値観についての益々つのる不安を暗示していた。

VI.VII.サイエントロジーの教義：セイタンと反応心

サイエントロジーの基本的公理は、人間は事実上、精神的存在であり、そのことはすなわち人間の肉体を何度も生まれ変わる「セイタン」である、ということである。セイタンとは、THETAの個体的表現であり、生命または生命の根源と理解されるものである。簡単に定義すれば、セイタンとは魂であるが、また現実の人間、すなわち宿る肉体を超越する連続かつ固執する自己同一性のことである。セイタンは非物質的であり、不死であり、あるいは少なくとも不死となる可能性を持ち、無限に創造的であり続ける潜在力を持つとも言われるものである。セイタンは、物質宇宙の一部ではないが、MEST (物質[Matter]、エネルギー[Energy]、空間[Space]、時間[Time]) から成り立っている宇宙を、制御する潜在能力を備えたものである。セイタンは、概して言えば (全くキリスト教の神による世界創造について言われることのようだが)、自らの快楽のためにこの物質世界にもたらされたと考えられている。セイタンは遠い昔にMESTと関わり、被害者となってMESTの罠に陥り、創造能力への制限を余儀なくされて、活動の領域を限定されたと考えられている。このように現在置かれている物質世界での人間の活動ならびに業績は、自らの潜在能力を発揮するには程遠い状態にあり、人間は、MESTの過去からの無数のもつれに取り付かれており、さらにこれらのもつれが反応心に記録されているので、人間の心は、過去の痛々しい不快な経験 (自ら味わった苦痛、あるいは他人に引き起こした苦痛の経験) を呼び起こすものすべてに、非理性的かつ感情的な反応をもたらす。反応心は、制御能力を軽視された状況の中で機能しているが、もし人間が自らに固有の、本来の精神的能力を回復させられるのなら、自らの肉体ならびに環境への制御は可能となる。人間が基本的には善であり、その存続は望むべきかつ可能であると見なされる一方で、過去における人間の能力喪失は、人間を絶滅寸前の種に変えてしまったのである。

VI.VIII.サイエントロジーの教義：輪廻と業

セイタンは無限の時間の中で、無数の肉体に居住したと信じられている。というわけで、サイエントロジーは細かい点では異なるが、ヒンズー教や仏教が教える輪廻の理論の主要推論に共通するものを持っている。サイエントロジーが強調する、過去の行動の結果としての現在 (または未来) の重要性は、業の概念に類似する。不幸な結果は、物質宇宙とのもつれの断面である「歴然たる犯行」(悪影響を及ぼす行為) の効果がもたらした結果である。セイタンが理想とすることは、理性的行動の持続、ならびに現象に対して「大義に固執する」ことであり、すなわち、直接現今の環境で起こっている出来事の行方を決定することで

ある。この考えは、サイエントロジーでそのような考えの概念や用語は使わないが、東洋的概念である、健全な行為によって未来のため善い輪廻をつくり出す、という概念に類比されるものである。過去の生活の出来事は、現在に影響を及ぼすが、サイエントロジーの開発した技術によって、これらの出来事は呼び戻され、直面され得るのだ。現在の問題の根源がこれらの出来事の中で探索され、特定化することもできる。これが、精神的な癒しに基盤をもたらしている手段である。つまりこれは、過去の行いの「輪廻」効果に変化を起こさせる機会を提供するものである。

VI.IX.サイエントロジーの教義：8つのダイナミックス

サイエントロジーによると、存在は、規模の上昇順序に従って8つの部門に分けられ、そのひとつひとつはダイナミックと名付けられるものとして、認識される。簡単にそれらを記述すると：第1は、自己のダイナミックであり、存在への自身の衝動である。第2は、セックス・ダイナミックであり、性行為ならびに家族単位および家族の維持双方を合わせたものである。第3は、存在への意志のダイナミックであり、これは学校や市町村あるいは国家のような集団または連合において見い出されるものである。第4は、人類がその存在を維持するための人類のダイナミック意志である。第5は、生物全体を含む全動物界の存在と存続への意志である。第6は、物質、エネルギー、空間ならびに時間という物質宇宙全体の存在への衝動である。第7は、名前のあるなしにかかわらず、すべての精神的現象を含む「魂の、あるいは魂としての存在への衝動」である。そして最後に第8は、無限としての存在への衝動である。このダイナミックはまた、「神のダイナミック」と呼ばれる崇高な存在者として同一視もされる。サイエントロジーは、生存に関係し、それぞれのダイナミックの生存は、サイエントロジーの実践の目標の一部として見られる。そのように、サイエントロジーの初段階の実践の多くは、サイエントロジーの支援を求める者（プリ・クリアーの人々）に、個人の精神的な益にやや限定されて関係はするが、究極的にはサイエントロジストは、自らの現在の生命は、セイタンとしての存続する存在の断片でしかなく、個人の生命は8つのダイナミックスで記述された上昇レベルのそれぞれに連結されており、したがって究極的には崇高な存在または無限性の存在と生存に関係するものである、ということを認識しなければならない。

VI.X.サイエントロジーの教義：治療とコミュニケーション

他の宗教と同じように、サイエントロジーに入門を許された者の第一にして最初の関心事は、現在の苦悩と苦痛からの即座の救済である。これは多くの宗教に見られる治療要素の魅力とするところである。そして初期のキリスト教において際立っていたように、信者が自らの信仰において成長するに従い、到達するよう期待されている神秘的、形而上学的、精神的な教えとならんで際立っているものである（ヘブル書5章12～14節参照）。多くのサイエントロジストは最初（反応心の制御能力を増進させることによって）、日常体験の改善ならびに知的能力の拡張の可能性を学んできた。そのような

結果を達成する可能性は、オーディティングの過程を通してであるが、ARCとして知られる公理で表示される。Aは、個人の感情体験、ならびに感情を通して他人と交わる感覚を表すアフィニティー (感情の反応) である。Rは客観的現象についての主体間の同意として表されるリアリティー (現実の事柄) である。Cとは、コミュニケーションを表す。そしてサイエントロジーでは大変重要なことが、コミュニケーションに付随しているのである。人々が好感を抱く時、客観的現象の性質について同意する時、コミュニケーションは大変容易に行うことができる。このARCという三角関係の概念に関連して、サイエントロジストには「トーン・スケール」として知られている、人間の感情を測る尺度がある。感情尺度が下がると、コミュニケーションも困難となり、現実の事柄も悪く体験されるようになる。しかしコミュニケーション自身は理解の増加を目的とする媒介者であるから、効果的かつ正確に用いれば、個人が物質世界で経験している罠から解放するものとして、治療における主要な媒介者となるものである。セイタンは、それ自身の過去とコミュニケートし、過去の痛ましい体験の性質を認識し、これらの足手まといから逃れることを許す自己知識の習得を可能にすることができる。

VI.XI.サイエントロジーの教義：
治療の仲介としてのオーディティング

トーン・スケールは、サイエントロジーから個人が受ける利益の可能性を最初に表示するものであり、無気力、悲嘆、ならびに恐れから熱狂 (さらに上のレベルでは、高揚そして静穏) というような慢性的な感情の状態からの上昇を指す。多くの人々がサイエントロジーに入門するのは、この種の利益を体験するためである。そのような進展を生み出す技術は、オーディティングというものの中に見い出せる。オーディティングとは、訓練を受けたサイエントロジストが、注意深く制御された質問を用いて、個人の痛々しい傷跡 (ひとつの「エングラム」) として反応心に残り、その人が理性的に行動することを妨害している、その人の過去の個々のエピソードに注意を引き戻してやることである。これらの理性的思考を妨害する影響力から解放されることは、個人が「トーン・スケール」を上昇し、その結果、能力の改善を図る過程であり、それはまた (ここにより十全な宗教的意義があるのだが)、セイタンが救済を達成する方法でもある。その過程とは、最初はセイタンが物質世界とのもつれの結果として苦悩している精神の異常に焦点を合わせ、最後にはMEST宇宙の病的な影響からの完全な解放を勝ち取るというものである。サイエントロジストは、この状態を「起因に立っている」と呼ぶ。この考えは、東洋の宗教で言われている救済の様相と明らかに類似性を持っている。またサイエントロジストは、個人を過去の行為 (業) の影響に包囲されたものとして見るので、彼らが支持する救済もまた、輪廻の影響力が破られ、個人が解放されるという過程 (悟り) を通して得られる概念である。究極の目標は、機能しているセイタン (身体から離れて活動できる人) として知られる個人が、身体を離れて存在し、すべての物質に対して「外在化する」と説明される状態になることである。そのような状態は、少なくともある種のキリスト教徒が、救われた魂の状態として認知するものである。

VI.XII.サイエントロジーの教義：救済への理性的手段

サイエントロジーの実践の背後には、上記の宗教哲学がある。ハバード氏自身はこれを、東洋の宗教の哲学にどことなく類似したもの、と見なした。特に氏は、ヴェーダという、ヒンズー教の伝統の一部を形成する創造の賛歌を、サイエントロジーの「行動のサイクル」(ある行動が完了するまでの連続した流れ) に酷似する概念を含むものとして引用した。行動のサイクルとは、誕生から始まって、成長を経て、腐敗と死に至る生命の明白な秩序であるが、サイエントロジーが与える知識を通して、このサイクルが持つ有害な影響は回避することができる。サイクルは創造、存続ならびに破壊のサイクルから、すべての要素が創造的行為であるようなサイクルへと修正することができる。サイエントロジーは創造性を唱道し、増加させ、混乱と消極性を克服することに専念している。サイエントロジーは、ヴェーダやゴータマ・ブッダからキリスト教のメッセージに至るまでの知恵が伝承される、連綿と続く「軌道」あるいは線を認め、これらすべての教えと何らかの類似性のあることを主張する。けれども、提示された知恵は、例えば仏教の例で言えば、個人の生涯で多分、何回かの救済の習得が許されたとしても、その結果を確約できる明白でまとまった実践方法はなかった。反復の可能性はわずかしかなく、救済の習得は、偶然または制御できない要因に任せられてきた。救済は、もしそれが現実に習得されたとしても、ここでもあそこでも、あるいは今でも昔でも、ごく少数の者によってしか習得されなかった。ハバード氏が主張したことは、宗教的実践を標準化し、あるいは恒常化することであり、救済論的結果の予測性を増加させることであった。そのように技術的方法論を精神的目標に適用することは、かつて可能だったとしても、発作的にそして偶発的にしか到達されなかった目標の実現のために、サイエントロジーが現代技術を採用する、ということを意味するものでさえあった。したがってこれは、確実性と整然性を精神的実践と習得に適用する試みと言える。サイエントロジーは理性的手順の採用によって、宗教的探求に鍛練と秩序を与えようとするものなのである。この意味で、サイエントロジーは、メソジスト主義が社会開発の初期の段階で、成し遂げようと努めた多くのことを、このテクノロジーの時代においては、救済の目標は一定の制御され、鍛練され、規律正しく行う方法で求められるべきだ、と説得することによって成し遂げて見せた。メソジスト主義者の実践方法に粉飾された言語が、いまだ現行のキリスト教の決まり文句となっているのに対して、サイエントロジーが唱道する方法は、もっと全面的に理性的技術手段に徹底した団体の面影を強く残すものである。サイエントロジーが採用する手段は、大乗仏教で言う救済への菩薩の道の第六の段階である、ウパヤ (「正しい方法」) にしばしばたとえられて来た。仏教のこの教えによると、信者は第七段階で (ちょうどサイエントロジーにおける機能しているセイタンと同じように)、肉体に縛られない超越した菩薩になるのである。

VI.XIII.サイエントロジーの教義：聖職者カウンセリングとしてのオーディティング

サイエントロジーが採用する手段は、聖職者カウンセリングという形のものであるが、もっと厳密に言うなら、オーディティング（ラテン語のaudire、聴くこと）の技術として編み出されたものである。この特殊技術ならびにオーディティングの器械装置は、サイエントロジーの宗教実践における中心部分を構成する技術として編み出されたものである。実践のパターンは、信仰の救済的利益を経験しようとする者には誰にでも重要なものであり、ハバード氏の努力を凝縮し、霊が悟りを開く過程を組織的に意識の深いレベルに到達させる、一定の手続きとなったものである。この方法は、クリスチャン・サイエンスにおける確約証言の場合と同じく、罪責感ならびに過去の苦痛や過ちの影響力の双方を滅却させようとするものである。

VI.XIV.サイエントロジーの教義：救済の段階

この癒しと救済論的過程におけるふたつの主要な段階とは、それぞれクリアーならびに機能しているセイタンとして記述できる状態のことである。サイエントロジーに初めて遭遇したプリ・クリアー（クリアーに向かっている人）は、過去の痛々しい感情的な経験の精神的障害物に煩わされている。オーディティングとは、これらのひとつひとつを意識に呼び戻させ、その個人が過去とコミュニケートすることを助け、感情的解放を起こさせる。それらの出来事と対決させ、それによって個人がその解放を超越し、これまで忘れていた煩わしさを、全くの冷静さと理性的意識をもって省みることのできる地点に個人を導こうとするものである。そのような障害物ひとつひとつの邪悪な影響力は、省みることによって消し去られる。それによって克服されるものは、思考途絶、罪責感ならびに無能感、過去の痛みと凝り、また感情的動揺による事故などであり、個人は「現在の時間へ」呼び戻される。すなわち、その人は、現世での初期の生活、あるいは前世での生活の「時間の軌跡」上でセイタンに起こった出来事の、セイタンを不能化している影響力から解放される。コミュニケーションを改善することによって、オーディティングは、セイタンを過去の障害物が除去された状態へと導く。個人はもはや反応心を持たない存在、少なくとも自分自身のことについては自己決断のできる存在となり、クリアーと定義される存在となる。機能しているセイタンとは、同じ過程でのより高いレベルにある、ということである。というのもこの存在は自分の環境への制御力を習得した存在だからであり、この存在はもはや現在宿っている肉体に依存しない。この存在は本当は、肉体の中にいないとも言われる。言い換えれば、機能しているセイタンはその人の精神的潜在力を充分に実現した存在であり、救済を達成した存在と言えるかもしれない。最近の著作、『サイエントロジーとは何ですか？』（p.222）では、「機能しているセイタンのレベルでは、人は精神的存在として、自身の不滅性を扱います。その人は永遠と関わりながら、セイタンである自分自身を扱うのです。…」と述べられており、死すべき人間のレベルより高い状態がいくつかあるということを示唆している。

VI.XV.サイエントロジーにおける宗教的役割：オーディター

サイエントロジーにおいては、宗教的配慮は、4つの媒介者を通して入手可能となる。媒介者の役割は互いに補足し合い、あるところでは重複している面を持つ。その担当者は、オーディター、ケース監督者、コース監督者、そしてチャプレンであり、オーディターの役割が最も基礎的である。オーディティングは個人を救う、悟りを究極的に目指す極めて大切な技術である。オーディターは他の人々を助け、またその人たちが自らを助けるよう、技法の訓練を受けた者である。「すべてのサイエントロジー・オーディターは、叙任を受けた聖職者となることが、要求されている」[『サイエントロジーとは何ですか？』p.557] そして、すべてのオーディターは、聖職に仕えることを可能にする訓練、これを受けたからといってもすべての者が聖職に就くわけではないが、とにかくそのような訓練を受けた者である。オーディターは、助けを求めるプリ・クリアーに、できるだけ中立的で治療的な扱いが与えられるような学習をする。ローマ・カトリック教会の聴罪師と異なり、オーディターは自らの精神的理解に従ったり、プリ・クリアーの要求について、自分の個人的評価による聴聞は行わない。むしろオーディターは、予め規定された手続きに詳細にわたって従っていく。サイエントロジー全体を貫いて目指しているものは、治療目的の精神的配慮から、枝葉的、偶発的、そして特異的な要素を除去することである。あらゆる努力で、オーディターの感情が、標準化された手続きならびに聴聞の技術を邪魔していないか確認する。聖職者カウンセリングはこのように、特にオーディティングする者の状況から言えば、従来の教会で考えられているものより、かなり精密な技術として、そしてかなり明白に集中した注意力が払われるものとして見ることができる。サイエントロジストにとって、聖職者カウンセリングは個人的な判断や、個人がもうひとりの個人へ与える気まぐれな権限による偶発的助言の提供ではなく、自己啓発と精神的知識を推し進める、組織化され制御された真剣な試みなのである。

VI.XVI.サイエントロジーにおける宗教的役割：ケース監督者

オーディティング手順の正しい適用の責任は、ケース監督者にある。ケース監督者の最も重要な機能のひとつは、オーディターが現在扱っているオーディティング・セッションで取ったノートを、注意深く検討することである。このノートは非常に専門的なものであり、よく訓練されたオーディター以外の者には理解し難いものであるが、適用されたオーディティング手順に関する意見、Eメーター (オーディターが使用する器機)が示した反応、そしてそのプリ・クリアーがどのような言動をしたか、という事柄からなっているものである。そのノートは、プリ・クリアーの精神的進歩がサイエントロジーの救済論に従ってなされていることを充分に示すよう、完全でなければならない。ケース監督者は、自分自身も高度に訓練されたオーディターであり、その上、ケース監督者としての特別の訓練を受けたものであるから、これらの専門的ノートが理解できるのである。ケース監督者は、オーディティングが規定された基準に従って行われてきたかどうか、技術が正しく適用されたかどうか、そしてプリ・クリアーが適切な進歩を見せたかどうかをチェックす

る。万が一オーディティングの最中、過ちが発生した時は、ケース監督者がそれを探知し、訂正する。ケース監督者は時には、過ちを犯しているオーディターに間違って適用された資料を研究し直させ、間違いが再び発生しないことを確約させる正しい手順の実践を要求することがある。ケース監督者は、各セッションの後で、オーディティングの次の段階を特定する。人のケースはそれぞれ違うので、それぞれ適用されるべき適切な過程を決定し、プリ・クリアーが正しく精神的進歩を遂げているのかを確かめるよう個々の検討を行う。したがってケース監督者の役割は、サイエントロジーのオーディティングが適切に行われ、コントロールが正しくなされているかを確かめることと言える。

VI.XVII.サイエントロジーにおける宗教的役割：コース監督者

コース監督者は、サイエントロジーの実践において、オーディターよりもさらに基本的な役割を持つ。ハバード氏が定めた規準に沿えるようオーディターを訓練するのは、このコース監督者である。コース監督者は、ハバード氏の開発した技術研究の専門家である。どのような障害をも認知して理解し、そしてサイエントロジー文書に直面する生徒が遭遇する、どのような困難をも解決するよう訓練された者である。コース監督者は、サイエントロジーの学生がサイエントロジーの理論を把握し、練習と実習によってその適用の仕方をマスターしているかを確認する。他の授業監督者と違って、コース監督者は講義はせず、またどのような方法ででも、その主題について彼個人の解釈は提供しない。ここは大切な点である。というのも、サイエントロジストは一般に、サイエントロジーで得られる結果は、ハバード氏が書かれたサイエントロジー教典に、忠実に従うことによってのみ生み出せる、と信じるからである。先生から生徒に伝えられる口頭釈義はたとえどんなに無意図的であろうと、原物の変更を不可避的に含むものである。というわけで、生徒が問題に直面している状況を認知し、その生徒に、どこに行けば自分の努力で解決策が得られるか指示する専門家として、コース監督者が必要なのである。

VI.XVIII.サイエントロジーにおける宗教的役割：チャプレン

サイエントロジーの教会やミッションにはチャプレンがいる。チャプレンはオーディティングの訓練を受けた者であり、聖職者コースもその訓練の本質的部分である。このコースは、サイエントロジーを宗教として、すなわちそれによって人々が救済を手にする手段として提示する。このコースには、世界の偉大な宗教の教えへの導入、礼拝式ならびに儀式の執行訓練、サイエントロジーの信条ならびに規定の研究、倫理ならびにオーディティング技術の講義などが含まれる。多分にチャプレンの役割の大部分は聖職者カウンセリングであるが、それはオーディティングの過程で与えられるカウンセリングではなく、サイエントロジストが信仰の教えと技術をマスターする上での問題や困難に、広く多方面にわたる意味での聴聞を行うものである。チャプレンは、組織の運営がスムーズに行われるよう取り計らい、もし求められれば、サイエントロジーの原理に従って、道徳的あるいは家族の問

題にさえ、自らの解釈を与えるよう勤める。彼らはまた、ある特定のサイエントロジー施設でチャプレンとして機能しながら、既成教会におけるビショップ (監督) 制のチャプレンがするのと同じように振舞う。チャプレンは教会で執行される通過儀礼 (すなわち結婚式ならびに葬式) の司式者である。週ごとの礼拝 (多くの人の都合に合わせて日曜日に行われる) では、チャプレンは礼拝を司り、礼拝について全般的な分別を払う。チャプレンはまた礼拝の中で、非国教主義聖職者のように、説教者としての役割を果たすが、その機能はどちらかと言えば (演説者と言うより) 注解者のものである。チャプレンの説話は常に、信仰原理の教えと適用に密着したものである。

VI.XIX.精神的目標を目指す技術的手段：科学ではなく宗教

サイエントロジーならびにその宗教的専門家の働きを理解するには、サイエントロジーが技術的な手段を精神的目標に連結させている、という点を認識する必要がある。サイエントロジーの技術への強調、その技術的言語の枝葉、ならびに組織的手順と詳細な順序へのこだわりによって、サイエントロジーが究極的な関心を持つ事柄の精神的および救済論的性格が、不明瞭にされることがあってはならない。サイエントロジーは、科学が支配的であった時代に出現した宗教であり、その方法論は、出現に至った時代の痕跡を担うものである。サイエントロジーが最も基本的に専念することのひとつは、人間は理性的に考えることによって、自らの強力で破壊的な感情を制御する必要がある、ということである。人はこの方法においてのみ、完全な自由意志と自己決断という、サイエントロジストが人間の権利として必要であると確信するものを手にするだろう。救いを得るためには、個人個人は、精巧に整理された公式を、絶えず確実に適用していかなければならない。クリスチャン・サイエンスと同じように、サイエントロジーは、確実性を求める。サイエントロジーの究極目標は、経験的証明の領域を超越するようである。また、たとえこの宗教が個人の経験を個人的確信、または確実性の道として強調したとしても、その信者の信仰は超越的であり、形而上的であり、また精神的である。サイエントロジー論説の科学的なスタイルは、その宗教的立場ならびに関心事を損なうことはない。

VII.サイエントロジー教会の発達に関する社会学的分析

VII.I.サイエントロジーの考えの発展：前世

1950年中頃からハバード氏はすでに、前世が人間の問題を説明する上で重要であるに違いない、という認識を示していた。氏がニュージャージー州のエリザベスに建てた財団は、当時、「前世の輪廻における死の状況」を「呼び戻す」ことに何らかの利益があるのでは、という研究のために捧げら

れたものである[Joseph A. Winter, *Doctor's Report on Dianetics: Theory and Therapy,*New York: 1951, p.189]。この興味は、過去の生活 (ならびに幼児期の生活) における有害な経験が、「エングラム」(反応心を形成する印象または心の映像のことであり、苦痛、無意識に関係しており、病気、抑制、したがって非理性的行為の原因となるもの) をつくり出したのだ、という見解への積極的な傾倒に発展した。ダイアネティックスならびにサイエントロジーはこのように、個人の現在の生活における初期の経験によってつくり出されたものと同様、エングラムをも除去するよう、拡張されなければならなかったのである。

VII.II.サイエントロジーの考えの発展：ダイアネティックスからサイエントロジーへ

精神生活のこのような中断は、もうひとつのレベルで、セータとして、すなわちMESTによって「狂った」思考の世界として表現された。オーディティングは、セータをこの厄介物から自由にすることを目指すものであった。セータの概念はまた1951年に改められ、「生命力、生の躍動、霊魂、魂」として認識された[『生存の科学』第1部、p.4]。この時点で、ハバード氏の信仰体系は、魂の癒しのための体系となったと言えるかもしれない。この発展は、1952年にハバード氏がサイエントロジーを開始すると同時に、この新しく拡大され、そしてさらに包括的となった信仰体系がより明確な形而上学的原理の説明付けをされて、ダイアネティックスを包含した時、益々明らかとなった。セータは現在、魂のさらに明白な表現であるセイタンとなり、今やこのシステムの宗教的側面も、明白となった。セイタンは、個人の本質的自己認識として受けとめられ、その人自身 (意識していることを意識するもの) とサイエントロジー理論は今や、セイタンを前世の生活 (以前人間の身体に宿っていたこと) の悪い影響力から解放する、という救済的務めのために、形而上学的正当性を提供するものとなった。

VII.III.サイエントロジーの考えの進化：セイタンと肉体

個人は、本質的にはこの肉体を占領するセイタンであるため、「私のセイタン」という言い方はできない。この意味でセイタンは、キリスト教の伝統的解釈で言う魂よりも、さらに重要なものと見られている。セイタンは自己認識を求めて (誕生の時点、誕生の後、あるいは誕生以前に)、肉体に入る。この意味でサイエントロジーは輪廻という仏教理論に含まれている概念に似ている。ハバード氏はしかし、セイタンが肉体に再配分される特色の説明を、どの仏教教典で見られるよりも、より厳密かつ精確に行っている。

VII.IV.究極的ならびに世俗的救済

サイエントロジーのオーディティングが最初に目指したことは、セイタンを反応心の束縛から解放することであった。その究極目標は、セイタンを元来の状態に復帰させ、もはや反応心を持たない安定した状態に到達させることであった。セイタンは、自己を次第に家族、同胞、人類、生物類、宇宙、精神的世界、ならびに無限あるいは神と同一視する中で、世俗的なものに捕らわれている状態と自己の生存という目前の目標 (第1のダイナミック) から、救済の可能性が次第に拡大されていくのを認識するようになる。このようにセイタンが、8つのダイナミックスを通して目指す究極目標は、サイエントロジストが「完全なOT」、「本来の状態」と呼ぶ、神にも似た状態に近いものを獲得することである。

VII.V.サイエントロジーの救済論

この体系自身が、救済論であり、救いの教えである。もし、最終的状態が、キリスト教で通常定められている救いを逸脱するとすれば、それは救済論者が多くの場合、究極的救いよりも、世俗的救済を問題にするからである。しかし、魂のより限定された見方が、教会と信徒双方を満足させてきたことがあったにしても、キリスト教もまた、人間をキリストと同等の世継ぎとして見る考えを持つ。ある種の運動、例えばモルモン教などは、人間が神の地位を獲得するという考えは、もっと明白に認識されている。救いが完成される時の条件は、サイエントロジーにおいては違いが見られるのであるが、魂を救うという長期的考えはこの教えの中に容易に発見できるものである。その実践において、個人の正気を救出すること、その精神的悲しみを癒すこと、鬱病克服を助けることという世俗的な目的が強調されており、先に概略的に説明された救済論への言及がそれを正当化する。

VII.VI.仏教ならびに
サーンキヤ派との類似性

サイエントロジーで説明される生命の機構は、ヒンズー教のサーンキヤ派ならびに仏教双方が持つ教えに、かなり類似するものである。マインドにおける反応心の累積は、業という考えにある程度似ている。過去の生命という考えは、東洋宗教における輪廻の説と多くの共通性を持っている。意識のさまざまなレベルへの道を求めるという考えは、ヨーガ (ヨーガ派はサーンキヤ派に近い関係を持つ) にも見られるものであり、ヨーガ修業者は超自然の力を習得できると信じている。

VII.VII.世界的ならびに個人的可能性としての救済

セイタン救済のための究極的展望は、サイエントロジーの作用を通して、人類、生物界、物質宇宙の存続という考えをも含む。社会ならびに宇宙を配慮する要素は、確かにサイエントロジーにも存在する。「この惑星をクリアーにする」(クリアーの人々すなわち、反応心を完全に取り除いた人をつくること) という考えが、目標として前面に押し出されたこともある。しかしハバード氏は時々強調点を変え、「サイエントロジーは、世界を救うことではなく、精神の存在である個人に精確な技術を適用することによって、能力ある個人をさらに向上させるものとすることに興味を持っている」とも書いている[『サイエントロジーの特質 (Character of Scientology)』1968年、p.5]。だがここで強調されているのは、典型的な福音運動が強調することでもあるが、世界の救済は個人のセイタンの救いに依存するということであるに違いない。

VII.VIII.サイエントロジーにおける道徳性

宗教は自らに課する道徳律がさまざまであるという点で、宗教によって道徳律の内容は実にさまざまではあるが、道徳律を命じることそのものは宗教の特色である、と言われることがある。サイエントロジーは、個人の潜在能力を引き出すことを全般的な目的として始められた。自由というものに強調を置くサイエントロジーは、伝統的なキリスト教会がいうものよりも、さらにもっと原始的な取り組み方で道徳律を採用した。しかし、極めて初期のダイアネティックスの説明によれば、ハバード氏は、個人は自らの限界に責任を持つもので、セイタンは基本的には善であり、もし引き続き有害な行為を続けるなら自らの力を消滅させる、ということを明言していた。オーディティングの強調点はまた、個人が自らの問題に直面し、自らの幸福のために責任を取ることに対する要請にも置かれる。個人は、自らが現在ならびに過去の生活において犯してきた「オバート行為」(有害な行為) を認知しなければならない。

『サイエントロジーのエシックス入門』という重要な出版物の中でL. ロン ハバード氏は、サイエントロジストに要求される倫理規準を制定し、倫理を守る責任は信仰の基本である、という点を明確にした。個人の目標は生存である。すなわち8つすべてのダイナミックスにおける生存であり、自己や家族への衝動から永遠に存在したいという衝動、いわゆる神のダイナミック [段落 VI.IX を参照のこと] に至るまでの生存である。サイエントロジーの概念による生存は、宗教において一般的な関心、すなわち救済と一致している。倫理的行為は、その目的を助ける理性的な行為と考えられる。このようにハバード氏は、個人が自らの救いを達成し、全人類の救済を促進しようとするならば、倫理的規準を自

らの行動に適用し、理性的に振舞わなければならない個人の必要性を強調した。したがって、将来の業を改善する道として、仏教徒が信仰的な利益のために専心するのと類似した方法で、サイエントロジストも自らの生存の達成、そして8つのダイナミックスにわたって広がった構成要素の生存の達成に向かって、理性的すなわち倫理的に振舞うことが課せられている。ハバード氏はまた、「倫理は、個人が自分自身のため、そして他人のため、これらすべてのダイナミックスにおいて、個人や他の人の最大限の生存を達成するために、自らが取る行動です。倫理的行為は、生存的な行為です。エシックスを用いることなしに、私たちが生存することはないでしょう。」とも書いている[p.19]。生存は単なる生存ではない。むしろ、適切な状態における生存である。「生存は快楽で測られます」[p.31]。つまりキリスト教と同じように、救済、幸福な状態を必然的に伴うものである。「けれども清浄な心と汚れなき手のみが、幸福と生存を達成する道です」[p. 28]。すなわち、実践において、生存の達成は道徳規準の維持を要求する。ハバード氏はこう述べた。「理想について、正直さについて、仲間に対する愛について言えば、これらのことが欠けている状況では、人は自分、または多くの人にとって申し分のない生存を手に入れることはできません」[p.24]。サイエントロジーの倫理は、道徳規準を内包するものであるが、それはサイエントロジーの倫理における本質的な合理性を主張することによって、さらに進んだものになる。すなわち、現代人の道徳の退廃や反社会的性格者の活動を正し、人類が救われる唯一の道として、その適用が考えられるからである。

ハバード氏は1981年、常識に基づいていたという一連の道徳律を公式化した。それらの公式が発表された本の中でハバード氏は、「宗教的教義の一部としてではなく…、個人の行いとして」と提示し、現代社会の堕落しつつある道徳規準への、ひとつの解決法として広く伝播されるよう意図されたものであると書いている。しかしサイエントロジストは、この道徳律を宗教の一部として採用した。この道徳律は、現代の言語で表現され、定められた原則の多くに社会的、機能的そして実用的正当化が加えられているものの、かなり大幅に、十戒ならびにその他のキリスト教道徳の戒めの双方を模倣するものである。この道徳律は殺人、窃盗、偽証、不法行為、善意の人々への損傷を禁止し、中でも、性的配偶者への忠誠、両親への畏敬、子孫への支援、節制、正しい政府への支持、義務の履行、他人の宗教信仰への敬意、健康への留意、環境への留意、生産性、そして有能性を提示する。またこれには、積極的、消極的な意味で、キリスト教でしばしば黄金律として見なされていること：「人にされたくないことは、あなたも人にするな」ということも含まれている。この小冊子は読者に、幸福と生存を気遣うすべての人々にこの冊子を渡すようにとの勧めも行っている。

VII.IX.サイエントロジーの宗教的主張

以上で述べた宗教に固有なさまざまな要素にもかかわらず、サイエントロジーは当初は宗教としては主張されなかった。1954年に3つの教会が統合されて、サイエントロジーとして（少し違ったタイト

ルではあったが)法人化された時でさえ、サイエントロジーの宗教的な関与は、充分検討されていなかった。しかしハバード氏は、サイエントロジーが宗教的目的を持つものであることは肯定していた。氏はこのように述べた。「サイエントロジーは、人間の書かれた歴史に表されている宗教の目標、すなわち知恵による魂の救いという目標を完遂した。サイエントロジーは、1950年代に至るまでの西洋で知られている、どの宗教にも勝って知的な宗教である。私たちは、療法を伴わずに単に私たちの真理を教えただけで、未開の西欧に文明をもたらすでしょう」[『人間の能力の創造』p.417]。確かにハバード氏は、キリスト教の審判の日を…「ゴータマ・ブッダが話していたことの粗削りな解釈のようなもの。つまり、生死のサイクルからの、魂の解放というものである」と述べたりし、いくつかの点でキリスト教を仏教より遅れているものと見なした[「フェニックス講演」1968年、pp.29–30]。サイエントロジー自身は、「最も古い意味でかつ最も深い意味で」宗教であった[同書、p.35]。1968年に出版された『サイエントロジーの特質』で、ハバード氏はこれ以前に主張した点のいくつかを修正し、サイエントロジーの背景にはヴェーダ、道教、ブッダ、ヘブル人ならびにイエス、それに数々の哲学者が含まれる、という主張を行っている。サイエントロジーは、「精神軽視による大量の未処理の仕事を克服するため、最初の宗教技術をもたらした」[p.10]ものであり、これを彼は、ゴータマ・ブッダの正直さと精確さに、ヘンリー・フォードの緊急生産実践性を掛け合わせたものと見ていた[p.12]。ハバード氏は、オーディターをオーディティングの訓練を受けた者と見なしていたが、またサイエントロジーの訓練を宗教教育としても見なしていたのである。

VII.X.宗教的指導者としてのL．ロン ハバード

宗教運動の創始者は、彼らを通して崇高な存在が顕現するという啓示の特別な代行者である、という主張がよく(本人によるのではないとしたらその追従者によって)口にされる。宗教指導者がこのように予言者的と見なされるという様相は、一般的にユダヤ・キリスト・イスラム教の伝統における運動の特長であるが、ヒンズー教-仏教の伝統では、宗教指導者はどちらかと言えば、自らが歩んだ悟りの道を追従者に示すことにより、追従者に利益をもたらす師として見られるのが通例である。ハバード氏は強く後者の型に習う。氏は、宗教的真理が啓示された指導者というよりは、科学的研究により事実を発見したとされる教師と見られている。その事実とは、ある種の治療的実践と知識の形而上学的体系であり、人間の崇高な存在と究極的な目的を説明するものであった。現代のサイエントロジーの業績は、ハバード氏のイメージを築き上げたが、氏は予言者、グル、宗教運動の発起人という名声を語り、その独特な経験に喝采を浴びせるよう生み出された、賞賛に満ちた伝記のスタイルで、氏はこともなげに天才として描写されている[例えば、『サイエントロジーとは何ですか？』pp.83–137]。キリスト教伝統では、サイエントロジーにおけるハバード氏の役割と名声に最も近い宗教的指導者は、クリスチャン・サイエンスの創始者、メアリー・ベイカー・エディー氏、そして19世紀後半ならびに20世紀前半のさまざまな新思想運動の指導者たちであろう。

VII.XI.宗教と教会組織

ひとつの宗教または宗教組織が、教会として組織されなければならない必然性は全くない。サイエントロジーの目的の内にある精神的な要素は、確かにこの運動が教会組織として登録される以前にあったものであり、これらの要素はまとまって、サイエントロジーの信仰体系を、宗教として称号されるに足るものとする。しかし仮に宗教の規準にそぐわなければ教会として組織すべきではないとしても、サイエントロジーはこのテストをクリアーする。教会が法人化され、1950年代に信条が公布され、そしてある種の礼典が定められた。信条と礼典は、サイエントロジーの信仰体系の背後に隠されていた決意を、制度的に公式化したものである。サイエントロジーの教会構造は、階級的であり、その教えを身に付けるのに要求される学識と精神的悟りの段階的な組織である。下層の組織は、伝道媒体として把握されるミッションの活動である。下級の教会は、叙任を目指す聖職者の基礎的訓練のために企画された任務を引き受け、「教区」の会員の地元の教会員に仕える。教会組織の一連の階級が、体制の中核を構成する。このレベルの上には、高度な任務であるオーディティング訓練ならびにオーディティングに関わる、より高い教会組織の階層がある。高いレベルの組織は、低いレベルの宗教施設に指導力を発揮する。この構造に類似するように、教会は信徒のボランティア聖職者としての務めを発展させ、社会ならびに共同体奉仕のための訓練を行ってきた。聖職者自体は階級的に組織されていて、それぞれの級は訓練コース終了認定証によって区分される。資格の低いレベルでは、ボランティア聖職者としての務めは特に刑務所や病院の訪問を引き受け、高いレベルの聖職者は、一定の数に達する所で、サイエントロジストの教会員を組織する。教会全体の形式構造は、キリスト教教派の構造とある程度類似するが、教えと実践という点で違っている。有志聖職者は、聖公会や他の教会の平信徒執事にやや平行する面を持っている。

VII.XII.サイエントロジーの信条

『サイエントロジー創設教会の儀式 (Ceremonies of the Founding Church of Scientology)』(1966年)という書物の中で、「サイエントロジーの教会礼典では、私たちは祈りや、敬虔の姿勢や、断罪の脅しなどは用いない。私たちが用いるものは、サイエントロジーの科学で発見された事実、真実、そして理解である」[p.7]。サイエントロジー教会の信条は、人間の権利にその多くを捧げるものである。これは、人が平等につくられ、それぞれ自分の宗教の実践と実行の権利を持つこと、それぞれの生命、健全さ、防衛への権利、さらに「組織、教会、政府を創造したり、選択したり、援助したり、支持したりする」権利、「自由に考えること、自由に話すこと、自由に自分自身の意見を書く」権利を持つ、という信念を支持する。またこの信条は、「心の研究および精神的に引き起こされた問題の治癒が、宗教から引き離されたり、非宗教的分野で黙認されるべきではない」という信念を支持する。信条はまた、「人間は本来善であること、生存を求めていること、人間の生存は、自分自身に依存し、自分の仲間に依存し、そして人間がこの宇宙との人類愛を達成することに依存していること」を

支持する。さらに「神の法が人間自身の種を破壊すること、他の人の正気を破壊すること、他の人の魂を破壊したり奴隷化すること、自分の友や自分のグループの生存を破壊したり、減ずることを禁ずるものであることを信じる。そしてこの教会の私たちは、精神が救われ得ること、そして精神のみが身体を救い、あるいは治すことができることを信じる」ものであるとこの信条は確認する。

VII.XIII.サイエントロジーの礼典

教会で定められた結婚式や葬式の儀式は、一方ではどちらかと言えば非伝統的なものであるが、西洋社会での一般的に実施されているものとは根本的に異なるものではない。「命名式」と呼ばれる洗礼式はもっと明白に、サイエントロジーの信仰体系の原理に遵守したものである。その目的は、最近この肉体を求めて到来したセイタンを支援することにあるからである。新しい肉体の獲得の時に当たってセイタンは、自己認識に不案内であるので、この命名式は、セイタンが新しい肉体の自己認識、その肉体の親、ならびに新しい存在を支援する父母と親しくなることを助ける、ひとつの方法なのである。したがってこの儀式は、サイエントロジーの形而上学に全面的に沿うところの、入会過程の一形式でもある。

VIII.礼拝と救いの概念化

VIII.I.礼拝：ひとつの変化しつつある概念

有神論的宗教 — その中でも伝統的なキリスト教は、礼拝が重要だとし、礼拝を神格への畏敬、崇敬の表現、その神格への謙虚服従の表現、祈り (その神格とのコミュニケーション)、ならびにその神格への賛美感謝の宣言などで構成させる。(より古い礼拝概念には犠牲 — 動物または人間の — 報復的ないしは嫉妬に満ちた、神格に対する追従の儀式なども含まれていた。しかし、礼拝概念が変わり、かつては不可欠のものとされた礼拝の古い形式には、現在法律に違反すると見なされるものもあるかもしれない。礼拝の考えは、伝統的教会においても、新しい運動においても、現在でも変化しつつあるものである。) 礼拝の伝統的な概念化は普通、礼拝する態度と行為の対象である神格 (複数の場合もある) または権化の要求条件に関係している。礼拝の定義は、最近英国の法廷で採用されたものに合わせて言えば、歴史的ユダヤ・キリスト・イスラム教の歴史上の実践の型に厳密に習って基礎付けられたものである。しかし経験的証拠が明らかにするように、この意味での礼拝は必ずしもすべての宗教においては行われず、たとえ行われたとしても、かなりの意味をなす偏差を示すものである。以下にそのうちのいくつかを例証する。

VIII.II.礼拝における偏差：上座部仏教

第一：上座部仏教 — その純粋な形態 — ならびにその他の宗教は、崇高な神格ではなく、信者の畏敬や賛美、礼拝を要求しないような究極的な法ないしは原理を崇め祭る。一般的に、神格は宗教の不可欠条件ではない。それに従えば、礼拝の定義は、キリスト教で行われているものよりも、もっと広義のものが採用されなければならない。

VIII.III.礼拝における偏差：日蓮宗仏教

第二：例えば日蓮正宗に見られるように、崇高な神格を否定するが、ある対象への礼拝を要求する宗教運動がある。創価学会仏教は1,500万人の信者を抱え、英国にも約6千人の信者を持つ宗教であるが、この宗教は御本尊という、究極的真理の重要シンボルないしは聖句が書かれている曼陀羅を礼拝する。これらの仏教信者は御本尊の礼拝をしている時、御本尊から祝福されることを求める。このようにキリスト教の世界で理解されている礼拝概念に似たものが、崇高な神格を明白に否定するところでも発生することがある。

VIII.IV.礼拝における偏差：クエーカー教徒

第三：広義のキリスト教伝統の中では、畏敬と服従の態度は、正教、ローマ・カトリックあるいは英国国教会で守られているように、信者が頭を下げ、ひざまづき、あるいは腹ばいになったり、賛美、感謝、祝福の言葉を発したり、執り成しによって逆に祝福を求めたり、という決まり切った行為の形を取る必要はない。キリスト教の中には、これらと相違する習慣を守る運動がたくさんある。クエーカー教徒は、その適切な一例である。クエーカー教徒は畏敬の念をもって集会するが、定式化した祈り、口で唱える祈り、賛美歌の斉唱、あるいは詩篇の読誦 などということをしない。多くの場合、彼らは全集会の時間中は沈黙するだけである。

VIII.V.礼拝における偏差：クリスチャン・サイエンス

第四：キリスト教の中で、古い既存教会においても、また比較的新しく設置されたグループにおいても、神の考えを益々抽象的な用語で表現しようとする傾向がある。最近の大神学者のいく人かが神というものの概念化を新しく行った結果、神というものを人格（パーソン、上記段落 IV.III. を参照のこと）として見る古い概念化は、ある人々にとっては時代遅れだとして、排除されている。ある意見調査によると、神を信じる人たちの中で、神は人格だとは信じず、むしろ神は力だと主張する者の数は、確実に増加の傾向を示している。新しく勃興した宗教運動の中には、これについて現代的で、抽象的神格理解を採用した「礼拝」形

式のものもある。クリスチャン・サイエンスはその一例である。この運動はサイエントロジーに先立つこと70年以上の歴史を持つので、その特色の多くにはサイエントロジーと共通のものがあり、しかも宗教として公認された長い歴史を持つので、この運動における礼拝態度をさらに詳しく探求することにしよう。クリスチャン・サイエンスでは、神は「原理」「生命」「真理」「愛」「心」「霊」「霊魂」と定義付けられている。これらの非人格的抽象化は、服従や崇敬の表現を要求せず、あってもそのような意向は、クリスチャン・サイエンス教会の礼拝では、ごく限られた表現でのみ許されるものである。礼拝に関するメアリー・ベイカー・エディ (クリスチャン・サイエンス) の意見を、『Science and Health with Key to the Scriptures』という彼女の著作から、以下に引用する：

「人に聞こえる祈りでは、精神的理解の働きは決して起こらない…長い祈り、迷信、ならびに信条は、愛の強力な翼を切り落とし、宗教を人間の形で修飾する。礼拝をどのような具象で表現しようと、それは人間の精神的成長を邪魔し、人間の過ちを越える力から人間を遠ざける[pp.4–5]。

汝は、『汝の主、神に心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして愛し』給うや。この戒めは、単なる物理的感情、愛情ならびに礼拝心すべてを放棄してまで、ということを含んでいる」[p.9]。

「イエスの歴史は、新しい暦を生み出し、我々はそれをキリスト教徒の時代と呼ぶ。しかしイエスは何の儀式的礼拝をも確立しなかった」[p.20]。

「神を礼拝する言葉が、日常生活の行為のためと言うより、一般的な公的礼拝のためにあると言われるのは、悲しいことである」[p.40]。

「私たちは物質的に礼拝するのを止める時にのみ、精神的に礼拝する。精神的な献身はキリスト教の魂である。物質という媒介を通しての礼拝は、異端である。ユダヤ教やその他の儀式は、真の礼拝の類型であり、影にしか過ぎない」[p.140]。

「イスラエル人は、自分たちの精神的なものへの礼拝を試みる中で、その思いを物質的なものに集中した。彼らにとって物質は本質であり、聖霊は影であった。彼らは物質的立場から聖霊を礼拝しようと思ったが、これは不可能であった。彼らはエホバに訴えたつもりでいたが、彼らの祈りはそれが聞かれたかどうかの確証もないまま、地に墜落した。というのも彼らには、癒しの力を示すことのできる神が理解できなかったからである」[p.351]。

クリスチャン・サイエンスの人々は、教会員全体として主の祈りを用いて唱えるが、この祈りについては、エディ氏の教えに従って、いくつかの確認事項が書き記されている。クリスチャン・サイエンスにおける沈黙の祈りは、「真理」の確認であり、嘆願ではない。神は現実に示されるべき「原理」であり、追従されるべき、あるいは機嫌を取られるべき「存在」ではない。このようにクリスチャン・サイエンスにおける礼拝はその形式、雰囲気ならびに表現において、伝統的な教会の礼拝と異なるものである。

VIII.VI.形式ではなく目標によって規定される礼拝

礼拝における偏差についての上記の意見は、もしすべての経験的証拠が議論に取り入れられるとすれば、礼拝には、現今のひとつの特定の伝統によって限定され、またそれに依存した定義より、さらに広い定義付けが必要であるということを示すものである。キリスト教会での伝統的な形式は、礼拝で起こるかもしれない、また実際に起こっているさまざまな様式すべてを (キリスト教の教会の内部でさえ) 試み尽くしたものではない。ここでしかし、礼拝の外面形式 (特別、地方的、地域的あるいは全国的な違いはあっても) と、我々が普遍的として表現する礼拝の目的とを区別しなければならない。礼拝の目的は、献身者と超自然の究極的なもの (存在、対象、法、原理、次元、「存在の根源」あるいは「事」) との関係を設立することであり、献身者の所属する宗教団体がどのようにその究極的なものを考え出したとしても、それは、献身者が救済または悟りの習得を究極の目標とするものである。目的に応じた、礼拝の特徴の強調点は、礼拝が前提とするさまざまな形の文化的相対性を明らかにする。一旦、礼拝がその目標とするものへの関わりによって規定されると、我々は、偶像から超越的な法則に至るまで、究極的なものへの膨大な概念作用を理解することができる。このように偶像は、恩寵を授ける、または損害をもたらす存在として崇拝される。擬人化された神格の礼拝は、信頼の関係を強調するが、また依存性をも強調する。超越的存在を知的に概念化したものの礼拝は、その神格の感情的な移り気というものには、あまり強調点を置かない。むしろもっと一般的な倫理の原理に沿った概念との調和を求めることにその強調点を置く。全く抽象的かつ究極的な真実、法、あるいは次元の礼拝は、知識の伝播や悟りの習得、そして人間の潜在能力の全面的な実現というものに関係する傾向を持つ。これらさまざまに特定化された目標のすべては、人間の救済探求の一部として見られるようだが、救済自体はさまざまに違った形で受けとめられるかもしれない。究極的なものへの崇敬、あるいは人間の「存在の根拠」への崇敬は、それがどのように記述されようと、生命に対するあらゆる敬意と配慮に共通するものであり、それは特定の文化に縛られた行動様式や規範に依存するものではない。

VIII.VII.礼拝の詩的流儀の衰微

多様な宗教の社会にあっては、礼拝を構成するものの概念は、もし宗教の多様性が正しく認識されるべきならば、抽象的な用語で述べられなければならない。宗教における最近の、そして過去から

継続している傾向は、抽象化され、さらに普遍化された表現が使われつつあるということである。これは大神学者や聖職者の間だけでなく、新しい宗教運動の間でも言えることである。科学的、技術的革新の時代にあって、神格または究極的なものについての人間の概念は、より科学的そして技術的経験と一致する用語で理解される傾向にある。これらの類いの言語ならびに概念作用は、かつては典型的に宗教的表現であった伝統的な詩的描写と対照的な関係にあるものである。詩的流儀は、新しい運動の中だけでなく、いわゆる伝統的と呼ばれる教会の中でも、確実に破棄されてきている。それはバチカン第二公会議以後のローマ・カトリック教会における改革や、英国国教会における聖公会祈祷書が、やや散文的、日常語的、口語的形式の表現に替えられていることに見ることができる。これらの教会の外部では、伝統の名残に対してさえも義務を伴わないような運動の中で、新しい言語および新しい儀式形式の創造が、かなり自由な形で行われている。これらの運動のひとつが、サイエントロジーである。

VIII.VIII.礼拝としてのコミュニケーション

サイエントロジーは、至高の存在の抽象的な概念化を、8つのダイナミックスとして提示する。サイエントロジストは、自らの気付きと理解力が、至高の存在または無限性を助け、一部となり、それと共に生存するよう、存在のあらゆる側面を含めることを追求する。サイエントロジストは、生命を崇拝し、神を存在の究極的根拠のひとつとして認識するが、この認識には、伝統的なキリスト教会で「礼拝」として考えられる儀式に酷似する行為のような特定の形を伴わない。サイエントロジーは、さまざまな宗教的背景を持つ人々の混合でできている運動であり、創造についての新しい概念化、生命の意味、救済を強調し、その教えは広く科学的方針だけでなく、ひとつ以上の偉大な宗教をも引き寄せるものである。したがって、サイエントロジーがその理論を抽象と普遍的用語で提示し、その礼拝の概念がこれらの観点を受け入れるのは、全く適切なことである。このような普遍性の立場は、以下のように表現されてきた。「サイエントロジーにおいて、我々はコミュニケーションの形で礼拝する。礼拝を効果的に行う者とは、距離の隔たりを越えて、至高の存在とコミュニケートできると見なせる者のことであろう」[『宗教としてのサイエントロジー』p.30]。

サイエントロジーの本質は、コミュニケーション、すなわちセイタン自身の過去および環境とのコミュニケーションを通しての理解である。そしてその意味では、キリスト教礼拝で起こるコミュニケーション、すなわち個人が祈りや聖餐式の礼拝で神格に求めるコミュニケーションと似ているかもしれない。実際、聖餐式にあずかる者を伝統的教会では、「コミュニカント (communicant)」という用語で呼ぶ。その目的とするところは、大体において同一である。すなわち、救済の長期的過程の一部として、個人を清め、その者の魂を復帰させることである。サイエントロジーにおいては、そのようなコミュニケーションにはふたつの根本的な形式がある。すなわちオーディティングとトレーニングである。

オーディティングは、個人がその人 (セイタン) の過去に対する個人的なコミュニケーションとして生じるものであり、オーディターならびにEメーターを媒介とするものであるが、基本的には、個人に本来の自己とのより良い関係をもたらそうとする過程であり、この意味ではその人を基本的な精神的本質に接触するよう求めるものである。

サイエントロジー教典におけるトレーニングは、真実の原理ならびに実存の基礎とのコミュニケーションである。深まる理解を通して個人は、その人とその人自身、他人、そして生命すべてとのより広範なコミュニケーションを益々求める。これらの活動もまた、たとえこの現代的な場面において、(神格への) 崇拝、贖罪という廃れた関心事、ならびに古代からの請願の手続きなどが無用になったとしても、礼拝に特有の要素を共有しているのである。

VIII.IX.サイエントロジーが目標とする生存

サイエントロジーの礼拝堂で行われる礼拝式の目的を明らかにする重要な用語は、「生存」であり、この概念はサイエントロジーの文書で繰り返し強調されている。しかし「生存」は、古い宗教概念である「救済」に代わる現代的同義語にしか過ぎず、救済はすべての宗教において、礼拝の中心的目標であり、力溢れる神格と依存的信者との関係の確立が、不幸で邪悪な経験の減少と消滅、そして最終的な延命の御利益の累積、増加という結果をもたらす。サイエントロジーはセイタンの救済、すなわち物質、エネルギー、空間、時間という障害物からの解放、そしてもっと類似した例で言えば、肉体的障害と日常生活の浮き沈みを克服する能力とに関わるものである。セイタンは、超人的本質または魂として、肉体より以前に存在したものであり、それを超えて生存する展望を持っている。生存は、究極的には第8のダイナミック、すなわち至高の存在の生存と、この究極的現実についての意識を拡大するための、オーディティングとトレーニングというサイエントロジーの活動に結び付いている。このように実践とは参加者にとって、自分たちの持つ超自然的なものについての認識を新たにし、補強することなのである。これは、我々が上述のごとく探った広義の意味において、礼拝と悟りの一儀式なのである。

VIII.X.オーディティングとトレーニング

サイエントロジーの中心的活動は、オーディティングとトレーニングである。これらが精神的救済の媒介である。これらの手段によってのみ、セイタンすなわち個人は解放され、生命と物質世界に対し、「起因」に立つ精神的状態を達成する。オーディティングは、それにおいて個人が自らの過去の痛みや衝撃に立ち向かうものであるが、その人が自らの生命に対する制御を手にすることを助け、反応心の非理性的衝動からその人を自由にする。このように、オーディティングを受ける中でプリ・クリアーは、精神的救済の探求に入ると言われるかもしれない。救済の与える益は増大し、究極的にはセイ

タンが物質的状態 (MEST) の「撹乱」から逃れられる状態に導くものである。そのような精神的探求は、救済を究極の目的とし、外見上の形式ならびに教義上の明細はさまざまであっても、世界の先端宗教のすべてが最重要視している問題である。

トレーニングは、救済を与えようと努力する他人を助けることに従事する人だけではなく、悟りを求める人にもコミュニケートする学問であるということが意図されている。これらの過程が暗示することは、個人は、自らの痛ましい過去に直面して立ち向かい、その人自身の失敗の責任を他人に負わせる傾向を克服することの必要性である。この目的を持つトレーニングは、段階的に組織立てられた、一連のコースを終了することを通して達成される。このコースの中で生徒がオーディティングの技術を学び習得する。オーディティングは、一旦、適宜な水準に達すれば、どのプリ・クリアーに適用しても効果があると信じられている。トレーニングは、集中プログラムとして組織されており、私がセントヒル荘のサイエントロジー教会への訪問で行ったように、トレーニング・コースへの参加者の、神経を集中したひたむきな態度を目撃した人は誰でも、生徒たちが一丸となって示している、目的へのひたむきな真剣さ、もちろんこれには宗教的決意があることは言うまでもないことだが、それに深く印象付けられざるを得ない。

VIII.XI.セガーダルの誤り

サイエントロジーは、最初から伝統的な教会員主義に沿わない組織の宗教である。現代のコミュニケーション革命に直面した時、設立された教会は教会員構造の制約を認識し、他の礼拝の形式を試みた。サイエントロジーはすでに精神的なサービスを提供する新しくより集中的な手順に進化した。オーディティングで必要とされる一対一の関係と集中的なオーディターのトレーニングのシステムは、教会員聖職者の慣習的な形式によって提供されること以上に、特定の人の精神的な向上を配慮した形式を構成する。

共通の理解に反して、礼拝としてのサイエントロジーの実践の地位はまだ法廷で取り組まれていない。以前の事例として、1970年のレジーナ V. 出生登録本署長官「Registrar-General Ex parte Segerdal and Another」の中で、根本的な問題はサイエントロジー教会の建物がイースト・グリンステッドで「宗教礼拝のための集会場」としての資格で整備されているか、教会が現地で行ったサービスが礼拝としての基準に沿ったものであるかについてであった。これらのサービスは週の講話、その他の集会、洗礼式、葬式、結婚式から成る。この訴訟でデニング卿はこれらの特定のサービスが礼拝の性質を持たないと裁定した。事実、サイエントロジー教会の宗教的実践の核はオーディティングとトレーニングの手順である。サイエントロジストにとって、精神的な現実性を伴うコミュニケーションとして礼拝が起こるという、これらの活動は、セガーダルの法廷によって扱われるサービスではない。もちろんこれらの礼拝活動は、キリスト教の礼拝を念頭に置く法廷で思い起こされる型には従っていないであろう。それは神に対する畏敬の念ではなく、その実践者の理解への礼拝である。

それは上記（段落 VIII.I–VIII.VI）で示唆したことから明らかである。どの宗教もひとつの至高の存在を前提とするものではない。セガーダル訴訟において、デニング卿は仏教を彼が信奉する原則の「例外的な事例」とし、他にも例外があるだろうと述べた。なぜサイエントロジーはそれらの例外とすべきでないのか？ 例外があるとしたら、原則そのものが問題になるのではなく、使われる定義が無効になるのではないか？ 例外の議論にも関わらず礼拝に必要な要素としての至高の存在の強調に戻る傾向は、他の文化からの反証に関わらず、文化的に根付いた仮定の持続の程度を示唆している。実際、もちろん、サイエントロジーは至高の存在を認めるが、現在の人間の啓発レベルでは、容易に感知できず、またそれとのコミュニケーションもまれである実体であると考えている。したがって、サイエントロジーは至高の存在を想定する一方、人が通常その存在の奥深い知識を争うことができるとは見なされない。これがそれ自体の中で謙虚さを示している。宗教は、人間は神の意志と心を知っていると強く主張するように促すため、時々、この謙虚さが宗教には欠けている。

この至高の存在に対する限定的な理解ゆえ、哀願、尊敬、称賛、とりなしを伴ったキリスト教によく見られる依存の姿勢は不適切となる。それらは、現代神学者によって進展させられた至高の存在を明確にする慣習的やり方を受諾したキリスト教徒にとっては不適切なものでしかなかった (IV.II.を参照)。畏敬の念はサイエントロジストの間にも欠如しておらず、畏敬の念を込めて創造するが、神は擬人化した用語で捉えられることはなく、ユダヤ・キリスト教の伝統に見られる礼拝の形式が当てはまらない。礼拝の本質はその外的形式よりも、その目的と対象物に見られる。サイエントロジーの実践礼拝を一形式として認めることは難しくない。

IX.学会のサイエントロジーに関する評価

IX.I.宗教を成すものについて学術的評価

宗教を成すものについての学術的評価は、究極的に人間の振舞いの観察に基づく。つまり観察できる現象が、宗教が実践されている証拠を決める適切な経験的証拠を提供する。学術的一分野の発展は、客観性、超然性、倫理的中立性に掛かっている。そして (一般的に神学に見られる) 規範的なアプローチの影響の減退によって、宗教を成すものについての査定のための新たな基盤が提供された。

IX.II.学術界によって評価される サイエントロジーの宗教的地位

宗教運動の客観的な研究を行っている社会学者たちは、通常サイエントロジーを宗教と見なしている。サイエントロジーに関する小論として『Religious Movements in Contemporary America

(現代アメリカにおける宗教運動)』編者 Irving I. Zaretsky、Mark P. Leone (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1973年)、この著者はサイエントロジーが確かに宗教であると言及している。英国の社会学者アイリーン・バーカー (Eileen Barker) は、編書『Of Gods and Men: New Religious Movements in the West』 (Macon, Georgia: Mercer University Press, 1983年) で、この特定の運動に注目している4分の3の論文で、サイエントロジーは宗教として問題なく議論されている。4番目の論文『Participation Rates in New Religious and Para-religious Movements』by Frederick Bird and William Reimer of Concordia University, Montrealにおいて、サイエントロジーは新しい治療運動として言及し、超宗教運動と暗示している。しかしながら、この著者はサイエントロジーと他のいくつかのグループについてこう述べている。「それらの象徴主義と儀式は著しく似ていて、それらは各人の中の秘められたパワーの宝庫を発現しようとする」[p.218]。アイリーン・バーカーが編集した『New Religious Movements: A Perspective for Understanding Society』 (New York: Edwin Mellen Press, 1982年) で、サイエントロジーについてさまざまな著者によって簡潔にしか言及されていないが、サイエントロジーが宗教運動ではないという示唆はどこにもなく、巻末の新宗教運動の用語解説にも載っている。

本著者によるセクト主義に関する研究として[Bryan Wilson、『Religious Sects』 (London: Weidenfeld; and New York, MacGraw Hill, 1970年)] において、セクトの種類の区分を示した。そこでサイエントロジーは確かに宗教団体であるとした。その中で、サイエントロジーは、社会学的にクリスチャン・サイエンスに、神智学的にアセリアス・ソサエティーに、さまざまな新思想運動 (the Church of Religious Science、the Unity School of Christianity、Divine Science) に似ていると区分される。

1990年、私はさまざまなセクトと新宗教運動の研究を集めた『The Social Dimensions of Sectarianism』(Oxford: Clarendon Press) という本を出版した。「サイエントロジー：世俗化した宗教」という章で、特にサイエントロジーは宗教と見なされるべきかという問いを扱い、実際にサイエントロジーが宗教であると認識されるべきであり、現代の世俗化し合理化した社会に適合する概念と指針を含むと結論付けた。

さらに最近の社会学の研究は同様の立場を取っている。このように、ロンドンのキングス・カレッジ新宗教研究所の所長ピーター・クラーク博士はヨーロッパにおける新宗教運動の規模と成長から見て、著書『The New Evangelists』(London: Ethnographica, 1987年) で、サイエントロジーを宗教として含めることに何のためらいもないとしている。現在ワーウィック大学の社会学教授ジェームスA. ベックフォードは、彼の著書『Cult Controversies: Societal Responses to the New Religious Movements』(London: Tavistock, 1985年) で、「カルト」という用語を、大衆の先入観に対する意思表示として、その軽蔑的な意味合いを否定した上で使用している。しかし、さらに重要なことは、無条

件にサイエントロジーが宗教であると認めている事実である。彼によると「社会学者は統一教会、サイエントロジー、神の子派、クリシュナ意識国際協会のような宗教グループに対する適切な称号をめぐってもめている…」[p.12]、その意見の相違はそのような運動がセクトやカルト、または単に新宗教運動と呼ばれるべきかどうかに関連しているが、それらはすべて宗教であり、ベックフォードの論考は読者を納得させた。何よりも、ロンドン経済学校の教授で自宅のオフィスで直接財政的にサポートする組織であるINFORM (新宗教運動に焦点を当てる情報ネットワーク) の創設者で元会長アイリーン・バーカーは、著書『New Religious Movements: A Practical Introduction』(London: Her Majesty's Stationery Office, 1989年) で、新宗教とそれらに対処する方法について正確な情報を人々 (特に身内を転向させる) に提供することを意図した。その作品の中で、彼女はサイエントロジーが宗教として彼女のテーマの一部であると見なしている [p.147]。その補遺の27の新宗教運動の中には、サイエントロジー教会が含まれている。

IX.III.サイエントロジーは宗教か？ — フリン教授

ニューオリンズのロヨラ大学のイエズス会士の社会学者ジョセフ H. フィシュテルが編集した学術論文集 (『Alternatives to American Mainline Churches』New York: Rose of Sharon Press, 1983年) の中で、現在ミズーリ州セントルイスのワシントン大学の宗教学者のフランク K.フリン助教授は、サイエントロジーの宗教的な地位の疑問について綿密に直接扱っている。彼はまずダイアネティックスの宗教的地位を認めた。

> 多くの解説者がサイエントロジーは宗教を装った心理療法であると主張する。しかし、問題の要点は人が厳格な規則によって療法を宗教や哲学から分離できるかである。「therapeuo」(癒す、治す、回復する) という言葉は、新約聖書に頻出し、ナザレのイエスによって精神と身体の両面の癒しについて言及している。
>
> ダイアネティックスは宗教性と精神的傾向を持っていたが、言葉の完全な意味において宗教ではなかった。ダイアネティックスはその療法の当然の結果として「超自然的な」報酬と呼ばれるようなものを約束しなかった。しかし、それは「正常を越える」報酬を約束した。第2に、その運動のダイアネティックスの段階で、エングラムは最初期の胎児段階にさかのぼり、第3に、ダイアネティックスは、自己、性、グループ、人類という4つの「ダイナミックス」あるいは「生存への衝動」だけがあった。第4に、ダイアネティックスの段階でのオーディティングのテクニックは「Eメーター」を使わなかった。
>
> サイエントロジーが宗教であると言われ始めた時に多くの論争がなされた。1952年のアリゾナ州フェニックスでのハバード・サイエントロジスト協会の法人設立、そして1954

> 年にサイエントロジー創設教会が設立された。しかし、法的法人化は、いつ具体的に宗教的概念が教会側の認識を明確にしたかわからない。しかし、これらの討論は19世紀の論争のひとつを思い起こさせる。キリスト教が始まったのは、イエスが生きていた時代か？ ペンテコステ派では？ それともパウロとその使徒の職によって？ [pp.96–7]

それからフリンはダイアネティックスからサイエントロジーへの移行において、上述した4つの要素を考え、第1の要因が超越的なゴールの変化として「クリアー」というゴールから「機能するセイタン」の確立というゴールになった。「『セイタン』という概念はもはや心の状態を指すのではなく、キリスト教の『精神』や『魂』という概念と似ており、不滅であり、脳や心を越えるものである」[p.98]。第2に、現在が、エングラムにある過去の人生と関係があった。第3に、新しいダイナミックスが加えられ、動物の生存、物質宇宙、精神、無限を含む。第4に、Eメーターが導入されたことについて彼はこう言っている。「私の観点から言うと、Eメーターの使用は『技術的に神聖なもの』と見ることができる。キリスト教徒が神聖なもの (洗礼など) を「外部や内面の見える徴候、見えない優雅さ」として規定するように、サイエントロジストはEメーターについて内面や見えない状態 (『クリアー』) を、外部に見える徴候を示すものとして規定する。」[p.99]

フリンはさらにこのように述べている。

> 宗教 (religion) という言葉は*religare* から来ており「互いに結び付ける」ことを意味する。これによって私は信仰制度として宗教の広範な定義は、個人やグループの声明を互いにつなぐシンボルを示し、それが一連の宗教的実践 (儀式) になる。そしてそれが系統立った生活様式によって支えられる。信条、実践、生活様式は、存在の究極的な意味を与えるように人々の生活を結び付ける。すべての宗教には3つの側面の基本的な要素がある一方、その信仰体系や儀式の実践よりも組織機構や生活様式を重んじるものもある。サイエントロジーでは、宗教的実践 (オーディティングのテクニック) を始めるグループの一例が見られる。間もなく強力な教会機構に発展し、そうしてその信仰体系を信条に体系化する。これは教会の進化の初期段階から、信仰体系を持っているわけではないことを意味しない。それは正式なやり方で成文化されたのではなく、組織化の技術が始まりだった [pp.104–5]。

フリンは、「強力な教会機構」によって一般的なサイエントロジーの組織と、段階的に整えられたコースやオーディティングの順序のシステムを示す。

X.サイエントロジーと他の信仰

X.I.サイエントロジーとその他の宗教との類似性

サイエントロジーは、観念形態、実践そして組織の事情が、伝統的なキリスト教会やそれと意を反する分派とは根本的に異なるものである。しかし多様文化と多様宗教の社会にあって欠かせない広い観点を取った場合、その他の運動が持つ、疑いもなく宗教だとされる立場と非常に近い立場を、サイエントロジーは持っている。サイエントロジーは、ヒンズー教のサーンキヤ派と観念形成的に深い相似性を持つ。しかしその教会員活動においては、非国教派の運動の場合と比べ統合的ではないが、非国教派のいくつかの団体と類似していなくもない強調点がいくつかある。その救済論的な目標は、断然に形而上学的であり、いくつかの点でクリスチャン・サイエンスに類似する。

X.II.二重会員資格

サイエントロジーの明確な特色は、会員は他の宗教的信仰を捨てて初めてサイエントロジーとのつながりが許される、ということが要求されないことである。この特色からサイエントロジーは、単なる付加的または補助的な信仰と実践で満足しているように取られがちだが、そのような推論は根拠のないものである。私はサイエントロジーのこの点に関して、個々のサイエントロジストまた教会幹部とも話を交わしたが、彼らの答えは、排他性は要求されないけれども、それは実践の問題として出てくるというものであった。彼らによると、人がサイエントロジーに段々深く関わってくると、避けることのできない事として以前の信仰を捨てるようである。例えば私の経験では、サイエントロジストになったユダヤ人は、文化的な理由からユダヤ教とのつながりを保ち、家族や友人とユダヤ教の祝日を祝うことはあっても、ユダヤ教を実践することはせず、その神学をもやがて信じなくなるようである。学者としての私の見解から、この説明は正しいと思う。サイエントロジストは、自分の信仰を、その会員の献身を求める完全な宗教と見なしている。

さらに、宗教的献身が排他的であり、二重または多重の会員資格は許されないというのはユダヤ・キリスト・イスラム教の伝統的特色であるが、この原理が、宗教間で普遍的に行われているわけでは決してない。ヒンズー教や仏教のほとんどの派では要求されないことである。ブッダは地方の神々を拝むことを禁じなかった。ヒンズー教は重複する忠誠に関して寛容である。日本では、多数の人々が仏教と神道双方の信奉家だと自認する。宗教の共生はよく知られた現象であり、ある点ではキリスト教にも発生したものである (例えば、ある聖公会主教の間で行われた心霊術や聖霊降臨主義の信仰組織は、公式な教義とは相いれないものではあるが、寛容に見られた)。サイエントロジーが、西洋世界のキリスト教で普通に前提とされているものから離れて、二重または多重の入会制度を採用することは、サイエントロジーの宗教としての地位を否定する有効な根拠とはならない。

X.III.サイエントロジーの公教的そして秘教的要素

サイエントロジーの表向きのイメージは、一般的な宗教の典型とされることと一致しない。サイエントロジーの文書は、広く流布している公教的な文書と秘教的な文書とに分けられるかもしれない。公教的な文書は主に、サイエントロジーの形而上学とその実用における原理に関係している。その実用とは、コミュニケーション、人間関係、そして知性と理性の維持、および人生への積極的な立場の維持という人々の問題を、彼らが対処できるように援助することである。秘教的な文書という限定された集成は、サイエントロジーの上級生徒にのみ閲覧を許すものであるが、この宗教の形而上学やオーディティングのさらに進んだ技術について、全面的な説明を与えるものである。セータ (精神の根本的思考) の理論、セータが過去の生命の過程で物質、エネルギー、空間および時間という物質宇宙に巻き込まれたことによるセータの低下などを詳細にわたって言及し、人が超自然的能力を習得 (厳密には、取り戻す) ことのできる方法を指示している。充分に熟達したサイエントロジストだけが、この秘教的な文書に書かれた信仰組織の釈義、ならびにオーディティング手順の高等レベルの完全な理解の重要性を把握することができるとされている。

公教的な教えと秘教的な教えとの区別において、サイエントロジーは決して宗教の中で独自だというわけではない。イエスが述べた原則、「私はあなた方に言うべきことがたくさんあるが、あなた方は今それに耐えることができない」(ヨハネ伝16章12節)、そしてパウロが老練の信者には堅い肉、幼子にはミルクを、という区別をした原理 (コリント書上3章1ー3節；ヘブル書5章12ー14節) によって、さまざまなキリスト教運動は、初歩的教義と実践、そして上級の教義と実践との区別をしてきた。キリスト教の非主流派での、知識に関する一般的な伝統を守る者は、隠すことなく秘儀の保存に専念した。「知識重視型」の宗派としての学者によって時々分類される現代の運動は、一様にそのような区別をする。その一例はクリスチャン・サイエンスである。クリスチャン・サイエンスは、特別クラスで資格をもった教師が、公認の実践者となる望みを抱く者に教える主題によって、その全般的な教えの内容が増すのであるが、その内容は極秘である。これとは別に、末日聖徒イエス・キリスト教会は、品行方正で監督から許可を受けたモルモン教徒にのみ、ということは、この他にもいろいろと条件があるが、収入の十分の一の献金を教会に収めた者に特別な儀式を行い、他の人間は見ることさえ許さない、ということを行っている。プロテスタントの主流派に近いペンタコステ派は時々、彼らの「聖霊の賜物」の教えと実践を、特別に指定した礼拝式でのみ全面的に披露するが、ペンタコステ派信者でない一般の者を引き寄せるよう企画された会合では、そのようなことはしない。そのような区別をする理由は、教育的配慮からであるが、上級資料は、比較的初歩の指導をすでに受けて、より高いレベルの指導をこなすことのできる者のみ、入手可能となっている。これはサイエントロジーが取る立場でもあり、サイエントロジーの教えは学生に集中力と系統立った努力とを要求するものだからである。

XI.サイエントロジーに適用される宗教の徴候

XI.I.文化的偏見の排除

新しい宗教運動の評価には、明らかにさまざまな困難がある。まず第1に、ほとんどの社会が宗教について持ってはいるが、話すことはない、古いものや伝統的なものを尊重する、という前提である。宗教的な用語や表現は、伝統への特定の言及により、しばしば正当だとされている。宗教問題の革新というものは、簡単に促進されるものでも、受け入れられるものでもない。第2の問題は、正統派 (特にユダヤ・キリスト・イスラム教の伝統) の強固な規範的立場である。彼らは逸脱を禁止し、そして逸脱する者たちを記述するのに、(「セクト」「カルト」「非国教主義者」「分離派」その他) というひどく軽蔑的な言葉を用いる。第3の問題は、以上の段落で指摘されたこと、つまりひとつの社会で文化的変容を受け、ひとつの宗教的伝統のもとで育った者にとって、他人の信仰制度を理解することや、他人が宗教的熱心さで力説すること、そして表現手段の正しさを認知することは、奇妙だが難しいものである。宗教的考えは、ある種の文化的偏見と遮眼帯を内包する。けれどもサイエントロジーのような運動を解釈しようとするには、これらの障害物を認め、そして超越していくことが、不可欠である。これは、人が一連の宗教的観念を理解し、それを真実だと受け入れなければならないということを意味しているわけではないが、もし他人の信仰観念の確信に適宜な敬意が払われるべきだとすれば、ある種の親密関係が設定されなければならないということである。

XI.II.これまでのケース

これまでの議論は、その他の宗教運動との比較、サイエントロジストの出版した文書や学術解説者によるサイエントロジーについての文書の感想などを折々に含んできたので、必然的に間口の広い散漫なものとなった。歴史、教義、実践ならびに宗教組織、そしてサイエントロジーの道徳的含意は、この運動の宗教的な地位として、現在の評価で最も話題とされている面に特別な注意を払って手短に調査されてきた。そのような評価の中で、多くの関連する考えが引き出され、その評価は、サイエントロジーが宗教であるという論点を満たしてくれるものである。しかし、宗教体系において、広範に広がり、高い確率で見られるこれらの特徴と機能を、一般抽象化された言葉で述べる試みをしてきたので (上記の段落 II.I. で)、これからサイエントロジーが宗教だと主張するための尺度として、この型を意識的に用いることは適切である。サイエントロジーで用いられている用語と、この型の細部に用いられている用語との間にはかなりの相違があるが、これは少なくとも一定限度は、多くの (恐らくはすべての) 宗教運動について言えることに違いない。にもかかわらず、抽象概念による一般性を用いる

ことを許すなら、不要な困難や不同意なしに、サイエントロジーが我々のつくった一覧の重要性にまで達していることを知ることができるはずである。

XI.III.宗教の徴候の光に照らしたサイエントロジー

では我々は、サイエントロジーの特質を、上記の段落 II.I. で設定した宗教の特色と機能を蓋然性一覧で比較することで見てみよう。我々はそれらの項目をサイエントロジーが賛成する場合、一致または条件付き一致として、呼応しないものを不一致もしくは条件付き不一致、そしてその他の場合を未決として示す。

(a) セイタンは、通常の感覚認知を超越する媒介者である。またサイエントロジーが崇高なものの存在を認めることがわかる。一致。

(b) サイエントロジーは、セイタンが自然の秩序を創造した、と仮定する。一致。

(c) セイタンは人間の身体を占領し、そのことが物質世界での連続的な干渉となる。一致。

(d) セイタンは人間の歴史以前にも働いていたし、物理的宇宙を創造したと言われ、自らの快楽、自己認識ならびにゲームのために肉体を占領する。しかしこれは無限の目的であり、サイエントロジーにおける崇高な存在は、特定の目的を持つものとしては提示されない。条件つきで一致。

(e) セイタンの活動ならびに人間の活動は同一である。セイタンの将来の生命は、現在の生活において反応心からの解放を手にする時に限り、深く影響を受けるのと同様、同じ過程によって、将来でも深い影響を受ける。一致。

(f) オーディティングならびにトレーニングは、それによって個人が、この生命に限らず後に占領する肉体においても、運命に影響を及ぼす手段である。一致。

(g) 伝統的な意味での礼拝における象徴的儀式 (例えばローマ・カトリックのミサ) は、クエーカー教徒における場合と同じように、サイエントロジーではごくわずかであり痕跡的なものでしかないが、存在することは存在する。しかし保守的見解を採用するので、我々はこの項目は未決と見なす。

(h) 和解の儀式 (例えば犠牲や懺悔) はサイエントロジーには不在である。個人はむしろ知恵と精神的悟りを求める。不一致。

(i) 超自然的な媒介者への献身、感謝、敬意、服従の表現は、サイエントロジーが処方した通過儀礼以外は、文字通り不在である。不一致。

(j) サイエントロジーは、グループに内在する価値の再補強の手段をあてがい、L. ロン ハバード氏の教典または教えが用語の公教的な意味でそのまま神聖とされる特徴ある言語を用いるが、これは「隔離され禁じられたもの」として神聖視された専門的な意味と調和しているとは言えない。不一致。

(k) 祝い事ならびに集団的な苦行は、サイエントロジーにおける強い特色ではないが、最近ではこの運動は、ハバード氏の誕生日の祝い、国際サイエントロジスト協会の設立、そしてオーディターの献身を祝う日など、いくつかの記念すべき機会を発展させてきた。条件つきで一致。

(l) サイエントロジストは、集団的な祭儀にはあまり参加しないが、運動の教えは全体的世界観を提供し、会員の注意を仲間意識と共通の自己認識の意義へと引かせる。条件つきで一致。

(m) サイエントロジーは高度な道徳的宗教ではないが、その形而上学的な前提がより明らかになるにつれて、道徳的な振舞いへの関心が強まった。1981年以来、サイエントロジストの道徳的期待は明確に表現された。これらは十戒の戒めに似ており、「オバート行為」(有害な行為) を減少させたいという長年の関心を明らかにするものである。反応心ならびに輪廻の教義は、仏教の教義に似た倫理的方向付けを内包する。一致。

(n) サイエントロジーは、目的の真剣さ、団体ならびに会員への献身と忠実さに強調点を置く。一致。

(0) サイエントロジーにおける霊魂転生の教えは、この判断規準によく合致する。累積する反応心は、セイタンにとって失点に相当し、そのような失点はサイエントロジーの技術を適用することによって、減少させることができる。一致。

(p) サイエントロジーには、基本的に「聴罪者」(オーディター) がいて、その何人かはまたチャプレンでもあり、基本的に釈儀と聖職的配慮を任務とする職務担当者がいる。

オーディター、コース監督者、ならびにチャプレン (実際すべての者は職員) は、サイエントロジーの理論を保ち、改悪から守る。その意味では管財人でもある。一致。

(q) オーディター、コース監督者およびチャプレンは、俸給を受ける。一致。

(r) サイエントロジーは、物質的宇宙の起源ならびに機能の説明と等しく、生命の意味ならびに目的への説明、そして人間心理学の詳細な理論を提供する形而上学的教義の体系を持つ。一致。

(s) サイエントロジーの正当性は、L. ロン ハバード氏による発見にある。ハバード氏自身の資源には、東洋古代の知恵への言及が含まれるが、しかしそのほとんどは完全に実験研究の結果だとされている。この伝統、カリスマ、そして科学への訴えの混合が、他の現代宗教運動では、奇妙にもクリスチャン・サイエンスの設立を見た。条件つきで一致。

(t) サイエントロジーの教義のいくつかの真理主張は経験的試験を越えるものだが、オーディティングは実践的効果がある、と言われている。サイエントロジーの目標は、たとえその手段が経験的試験を許すと主張されても、教義の形而上学的側面への信仰に依存する。条件つきで一致。

XI.IV.比較の検討

以上のようにサイエントロジーを宗教の蓋然性の一覧の下で評価した結果は、一致とされたものが11項目、条件つき一致が5項目、不一致が3項目、未決が1項目であった。当然これら宗教のさまざまな特徴および機能を前提にそれぞれ均等の比重を有すると考えることはできないし、数値が機械的な適用の根拠となって、不当な評価を生み出すことがあってはならない。いくつかの項目、例えば俸給を受ける専門家の団体の存在は宗教には普通のことであっても、宗教に限定されないため、他の項目よりあまり重要でないと見なしても構わない。同様に宗教に共通する、宥 (なだ) めの要素は、近代に設立された多くの宗教団体が自ら解放してきたところ、つまり魔法に依存する以前からのパターンの名残の特徴であるにしか過ぎないと見られるかもしれない。ほとんどの伝統的宗教がこれらの蓋然性に合致する一方、多くのすでに公認されている教派は、これらのいくつかとは調和できない。我々は礼拝に関してクエーカー教徒にこれを見るし、正当性に関してはクリスチャン・サイエンスにこれを見た。ユニテリアンも礼拝、神聖化、罪ならびに徳についての伝統的概念、および形而上学的教えの意義などについて、さまざまな項目で調和を欠くと推察できる。キリスト・アデルフィアン派もクエーカー教徒も、宗教専門家や彼らの俸給に関する規準に合格することはないだろう。

XI.V.サイエントロジストは自らの信仰を宗教と認識する

上記の一覧の使用は、この意見書に示された調査結果が形式的または抽象的な推論のみに依存しているという印象をつくり出すのを許してはならない。この一覧は、経験的証拠、すなわち観察された行動を評価するべき基礎である。多くのサイエントロジストは、彼ら自身の強い宗教的決意を持っている。彼らは自らの信仰ならびに実践を宗教として捉え、その多くは、伝統的教会の信者の間で普通に見られるものを遥かに超える献身のレベルに、自分たちを置いている。この点で多くのサイエントロジストは、古い時代に設立された教会および教派の信者の大多数よりも、日常的にもっと熱心に宗教に献身しているキリスト教セクトの会員のように振舞う。社会学者のひとりとして私は、サイエントロジーが、唱道者たちの深く熱心な献身から導き出された、宗教信仰と実践による正真正銘の体系であると見る。

XI.VI.宗教における現代的変化

我々が確認したのは、すべての宗教が進化の過程を経たということである。宗教は時代を超えて変化する。それはまた、宗教自体が変化を企てるということでもある。社会的産物のひとつとして宗教はそれが機能する社会の色相や特色の多くを取り入れ、そしてより新しい運動が (少なくともその起源の時期では)、古い運動には発見されなかった特長を発露させる。今日の宗教における新たな発展が明らかにすることは、「外部にある」客観的と断定される現実への関心よりも、主観的経験と心理学的健全さに興味が多く集まっていることである。したがって、あまり問題にされないのは、礼拝の形式であり、比較的問題にされるのは、遠く離れた救済の神がもたらす、しょせん慰めにしかならないものよりも、その他の源からの保証 (そしてこれ自体救済の一類型である) の獲得である。したがって我々は、型として用いた一覧の中で明らかとなったこの重要性に、もっと期待しなければならない。この型は、宗教に現存してはいるものの、古代の実践に由来するものを多く反映している。新しい宗教は、主流プロテスタント教派と同じくらい古くからの宗教にあるように、これらの要素すべてと一致することはないと考えられる。それらは、その宗教が生まれた進化の段階の特色を反映するものである。したがって我々は、現代の運動が、我々の (比較的時代とは関係のない) 型におけるすべての項目と一致しないことを、認識しなければならない。これらすべてを考慮に入れた上で私は、サイエントロジーが善良な宗教であり、そうだと見なすべきであると結論する。

ブライアン・ロナルド・ウィルソン

1995年2月

ブライアン・ロナルド・ウィルソン

ブライアン・ロナルド・ウィルソン氏は、オックスフォード大学の社会学名誉助教授です。1963年から1993年まで、オール・ソールズ大学で特別研究員として勤め、1993年に名誉研究員として選任されました。

ウィルソン氏は40年以上にわたって、英国ならびに米国、ガーナ、ケニヤ、ベルギー、日本、その他の諸国における少数派宗教運動の研究を行ってきました。氏の研究には、これらの運動についての出版物を読むことや、どこであれ可能な限り、会合、礼拝式、および家庭内で会員と交流することが含まれます。また他の学者の研究に対して継続的に注意を払うことや、批評的評価をすることも必然的に伴います。

氏は学士号 (経済学) および 博士号をロンドン大学から、文学修士号をオックスフォード大学からそれぞれ取得しています。1984年、オックスフォード大学は、氏の出版物の価値を認め、文学博士の学位を授与しました。1992年、ベルギー、ルーヴァインのカトリック大学では名誉博士号が授与されました。1994年、氏は英国学士院の特別会員に選ばれました。

さまざまな時期に氏は、さらに次のような地位に任命されています。

1957-58年、イギリス連邦基金特別研究員 (ハークネス財団) 、アメリカ合衆国、バークレーのカリフォルニア州立大学。

1964年、ガーナ大学客員教授。

1966-67年、アメリカ学術協会顧問、アメリカ合衆国、バークレーのカリフォルニア州立大学。

1968-72年、宗教社会学の研究顧問、イタリア、パデュー大学。

1975年、日本協会の客員研究員。

1976年、82年、86年、93年、客員教授、ベルギー、ルーヴァインのカトリック大学。

1978年、スナイダー客員教授、カナダ、トロント大学。

1980-81年、宗教社会学客員教授および宗教研究顧問、タイ、バンコクのマヒドル大学。

1981年、スコット客員研究員、オーストラリア、オーモンド大学、メルボルン大学。

1986年、客員教授、オーストラリア、クイーンズランド大学。

1987年、特別客員教授、アメリカ合衆国、サンタバーバラのカリフォルニア州立大学。

1971-75年、宗教社会学国際協議会 (規律のための世界規模の組織) の会長を務める。そして1991年、宗教社会学国際協会と改名したこの組織から名誉会長として選任される。

1977-79年、宗教に関する科学的研究協会の評議委員 (アメリカ合衆国)

「宗教に関する科学研究ジャーナル (Journal for the Scientific Study of Religion)」の欧州準編集者を数年間務める。

「宗教社会科学年報 (The Annual Review of the Social Sciences of Religion)」の共同編集者を6年間務める。

氏は英国、オーストラリア、ベルギー、カナダ、日本、アメリカ合衆国で、さらには折に触れてフィンランド、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、ノルウェー、スウェーデンでも少数派宗教運動について広範にわたる講演を行いました。

氏は英国、フランス、ギリシャ、オランダ、ニュージーランド、南アフリカの法廷で専門家としての証言を要請され、オーストラリア、ラトビア、ロシア、スペイン、フランスの法廷では宣誓供述書に関する証拠を提供しました。氏はまた、宗教運動に関する専門的な助言を文書にして英国下院議会の国務委員会に提出しています。